

福井県埋蔵文化財調査報告 第135集

福井城跡

— 足羽川右岸線道路整備工事に伴う発掘調査 —

2 0 1 2

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

福井城は、明治に至り廃城となると、城郭諸施設が壊され、堀が外堀から順次埋め立てられていきました。そして、福井空襲や福井地震、御屋形地区再開発を経て、昭和の終わりまでには、地上に残る福井城のおもな痕跡は本丸を囲む積み直された石垣のみとなりました。ところが、福井城は福井市の中心市街地の前身であり、現在の街区や道路の多くは城郭内・城下の街区や道路を引き継いでおり、福井城の痕跡と言えるのです。

新世紀に至る頃、JR福井駅を中心とする中心市街地の再開発事業が本格化し、それに伴う発掘調査が継続的行われました。その成果として、現在の道路の位置は、福井城のものを踏襲していることが再確認されました。また、これまでの開発により大きく破壊され、既に消滅した部分も少なくありませんが、それでも石垣や道路などが広範囲にわたり地中に残存することがわかってきました。これらの情報を集成し、現代に残る福井城下の絵図と比較検討することで、より正確な福井城の姿が把握できるようになります。そのためには、まだ情報が不足しており、今後も調査の積み重ねが必要です。

さて、今回の発掘調査は、福井城の南東の外曲輪のうち足羽川に面する箇所にて実施しました。調査区中央にて検出した道路を挟み、東西に屋敷地を検出しました。絵図によると、東側の屋敷は慶長から慶応に至るまで代々山本氏が居住したようです。また、西側の敷地は、幕末までは藩の小道具方が居住した組屋敷があり、時期による区画の変化が窺えました。なお、この組屋敷の存在から、この界限は小道具町と呼ばれました。

今回は、必ずしも豊富な遺構・遺物を検出できませんでした。しかし、伝承される福井城下絵図などと比較することで、遺構の変化の時期を把握しうる可能性を見出しました。この調査および本報告が、地元の方をはじめとする福井県民の方々の埋蔵文化財の意義とその重要性を理解する契機、また、そのための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご協力を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。

平成24年12月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所 長 佐 藤 圭

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが足羽川右岸線整備工事に伴い、平成16・18年度に実施した福井城跡(福井県福井市豊島1丁目所在)の発掘調査報告書である。
- 2 福井城跡(右岸線地点)の調査は、福井県福井駅周辺整備事務所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、本多達哉・釘谷 紀が担当した。
- 3 発掘調査は、平成16年10月14日～平成16年11月26日、平成18年10月16日～平成18年12月21日の期間に実施した。出土遺物の整理作業は、平成19年4月～平成23年3月の期間に福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は御嶽貞義が当たり、御嶽、釘谷、木村茉莉が分担して執筆した。なお、執筆分担は以下の通りである。
御嶽 第1・2・3章、第4章3・4節、第5章 木村 第4章第1・2節 釘谷 第4章第5節
- 5 福井城跡(右岸線地点)に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 6 検出遺構の図化・製図は、平成16年度の調査ではジビル調査設計株式会社に、平成18年度の調査では株式会社日本海コンサルタントに委託して行い、釘谷が校正した。なお、平成18年度は遺構の土層断面の図化についても委託した。遺構の写真撮影は本多・釘谷が行った。出土遺物のうち土器・陶磁器、金属製品の図化は当センターで行ったが、石製品の図化と、すべての製図・版組、写真撮影・写真図版作成は、平成22年度に株式会社イビソクに委託して行った。校正は中原義史、御嶽が行った。
- 7 本書に掲載した遺構図は、委託して作成したものを一部改変して使用した。出土遺物の写真図版も掲載にあたり一部改変した。
- 8 当センターの実施する福井城跡関連の調査は、FKJを略号とし、調査年次と年内の福井城跡関連調査の開始順を組み合わせて表記する。右岸線地点の調査は、FKJ04-1とFKJ06-10である。遺構番号は、種別に関わらず通し番号を付し、調査を示す番号と組み合わせて表記する。FKJ04-1の遺構は4101～4170、FKJ06-10の遺構は61001～61050である。各番号の前にその遺構の種別を付す。
- 9 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符合する。挿図の縮尺は各挿図に記した。写真の縮尺は不同である。
- 10 本書における水平レベルの表示は海拔高(m)を示し、方位は地形図が真北である以外は座標北を示す。また、X・Y座標値は国土方眼座標系第Ⅵ系に基づく。
- 11 遺構図の縮尺は1/400・1/100・1/50を、遺物実測図の縮尺は1/4を基本とした。しかし、種別や個体の大きさにより、適宜これら以外の縮尺も使用した。
- 12 断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編 新版『標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に拠る。
- 13 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 14 発掘調査には、地元の方々の参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 調査地の位置	3
第2節 調査地の概要	3
第3章 遺構	6
第1節 近世の遺構	6
第2節 古代の遺構	14
第4章 遺物	17
第1節 土器・陶磁器	17
第2節 瓦	18
第3節 金属製品	23
第4節 石製品	23
第5節 古代の遺物	28
第5章 総括	30

図 版 目 次

図版第1 近世の遺構

- (1)FKJ04-1 調査区全景 近世Ⅱ
- (2)FKJ04-1 調査区全景 近世Ⅱ
- (3)FKJ06-10調査区西側全景 近世Ⅱ
- (4)FKJ06-10調査区東側全景 近世Ⅱ

図版第2 近世の遺構 FKJ04-1

- (1)F1 石列周辺の遺構
- (2)土坑4119完掘状況
- (3)土坑4101とその周辺の遺構
- (4)屋敷境溝4164

図版第3 近世の遺構 FKJ06-10

- (1)道路61015砂利敷路面
- (2)道路61015脇石列
- (3)道路61015下層 溝検出状況
- (4)道路61015下層の遺構61030・31・34

図版第4 近世の遺構 FKJ06-10

- (1)石組61003
- (2)石組61003水路部分と礫敷
- (3)井戸61039半裁状況
- (4)井戸61039底板検出状況

図版第5 近世の遺構 FKJ06-10

(1)柱穴61019

(2)柱穴61023下層

(3)柱穴61028

(4)柱穴61029

図版第6 近世の遺構 FKJ06-10

(1)石組61010

(2)石組61010

(3)石組61010下層

(4)石組61012

図版第7 近世の遺構 FKJ06-10

(1)石組61012

(2)石組61012下層

(3)G9・10石列

(4)G9・10石列

図版第8 古代の遺構

(1)FKJ04-1 調査区全景 古代Ⅱ

(2)FKJ04-1 調査区全景 古代Ⅰ

(3)FKJ04-1 調査区全景 古代Ⅰ

(4)FKJ06-10調査区全景 下層確認状況

図版第9 近世の遺物 土器・陶磁器①

図版第10 近世の遺物 土器・陶磁器②

図版第11 近世の遺物 石製品

図版第12 近世・古代の遺物

(1)金属製品

(2)須恵器・土師器

挿 図 目 次

第1図 調査地の位置	2	第11図 遺構配置図④	14
第2図 調査区の位置	2	第12図 土器・陶磁器実測図①	19
第3図 調査区と福井城の街割	2	第13図 土器・陶磁器実測図②	20
第4図 調査区配置と各調査区の遺構面	4	第14図 瓦実測図	21
第5図 調査区全体図	5	第15図 金属製品実測図	24
第6図 遺構配置図①	7	第16図 石製品実測図①	25
第7図 道路61015とその下層の溝状遺構	8	第17図 石製品実測図②	26
第8図 柱穴列	9	第18図 須恵器・土師器実測図	29
第9図 遺構配置図②	11	第19図 調査地周辺の変遷	32
第10図 遺構配置図③	13		

表 目 次

第1表 調査の経過	1	第5表 金属製品観察表	24
第2表 遺構一覧表①	15	第6表 石製品観察表	27
第3表 遺構一覧表②	16	第7表 須恵器・土師器観察表	28
第4表 土器・陶磁器・瓦観察表	22		

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

この調査は、福井駅付近連続立体交差事業のうち足羽川右岸線整備工事に伴い実施した。足羽川右岸線は、足羽川にかかる木田橋の北詰から西へ延びる道路より分岐する新設の道路であり、JR北陸本線の高架をくぐり、西側の高架側道5号線に接続する。その路線上は、周知の遺跡である福井城跡の武家屋敷地が展開する外曲輪にあたる（第2・3図）。そのため、福井駅周辺整備事務所は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターへ依頼し、工事対象範囲内における埋蔵文化財の存在や工事による影響を確認するための試掘調査を実施した。

試掘調査は平成15年2月18日に実施した。延長約110mの工事対象範囲内に4カ所の試掘坑を設定し調査にあたった。その結果、工事対象範囲の全域において埋蔵文化財の存在が確認され、計画される工事はその周辺の埋蔵文化財に影響を与える可能性が高いものと考えられた。その認識をもとに協議した結果、工事対象範囲のうち東側約25m分を除く部分を調査の対象範囲とし、周辺の工事の進捗にあわせて発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

発掘調査は、周辺の工事の進捗にあわせるために、調査対象範囲を二分して、期間を隔てて実施することとなった。調査対象範囲のうち東側部分（FKJ04-1地区）は、2004（平成16）年10月14日～11月26日の期間に実施した。残りの部分（FKJ06-10地区）については、2006（平成18）年10月16日～12月21日の期間に実施した。なお、FKJ06-10地区は、遺構の残存状況によって、さらに東西に二分され（第2・4図）、調査の進捗状況も東西で異なる。以下、調査区ごとに調査日誌を抄録する（第1表）。

第1表 調査の経過

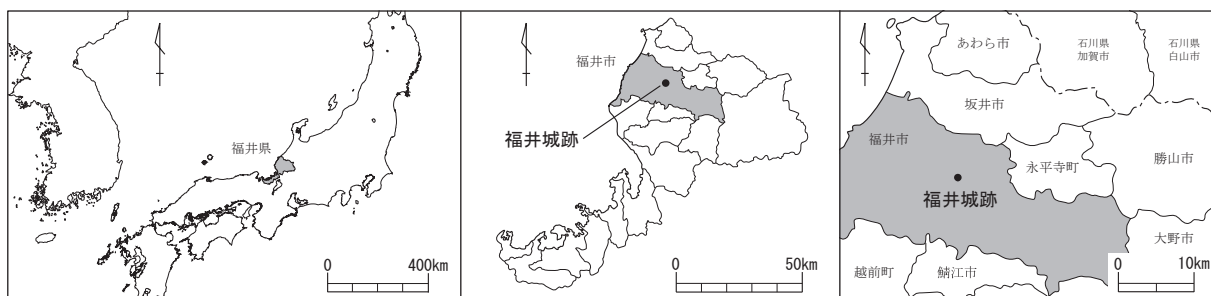
FKJ04-1 地区(平成16年度調査)

10月14日	調査開始。
10月27日	笏谷石の集積など測量。
11月2日	調査区(1面目)の測量。
11月11日	調査区全景の撮影。
11月13日	調査区(2面目)の測量。
11月16日	遺構・包含層掘削。
11月22日	調査区全景(最下層)の撮影・測量。
11月24日	遺構測量・土層注記など。
11月26日	調査終了。

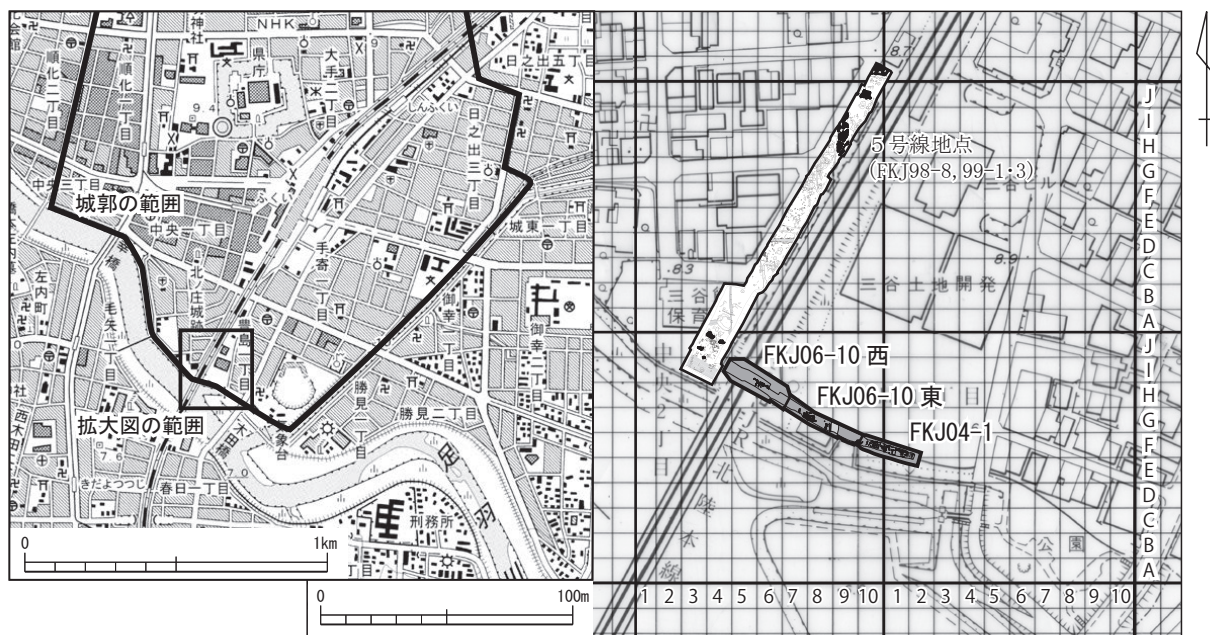
FKJ06-10 地区(平成18年度調査)

10月16日	調査開始。
10月25日	石列・集石の検出。測量。
10月27日	集石の撮影・測量。
11月9日	道路の撮影。測量。
11月16日	東側調査区の撮影・測量。
11月17日	個別遺構・道路の撮影。
11月22日	西側調査区の全景撮影。
11月28日	東側調査区の遺構掘削。撮影。
12月6日	西側調査区の遺構掘削・撮影。
12月8日	西側調査区の全景撮影。
12月13日	古代包含層掘削状況の撮影。
12月15日	遺構測量・土層注記など。
12月21日	調査終了。

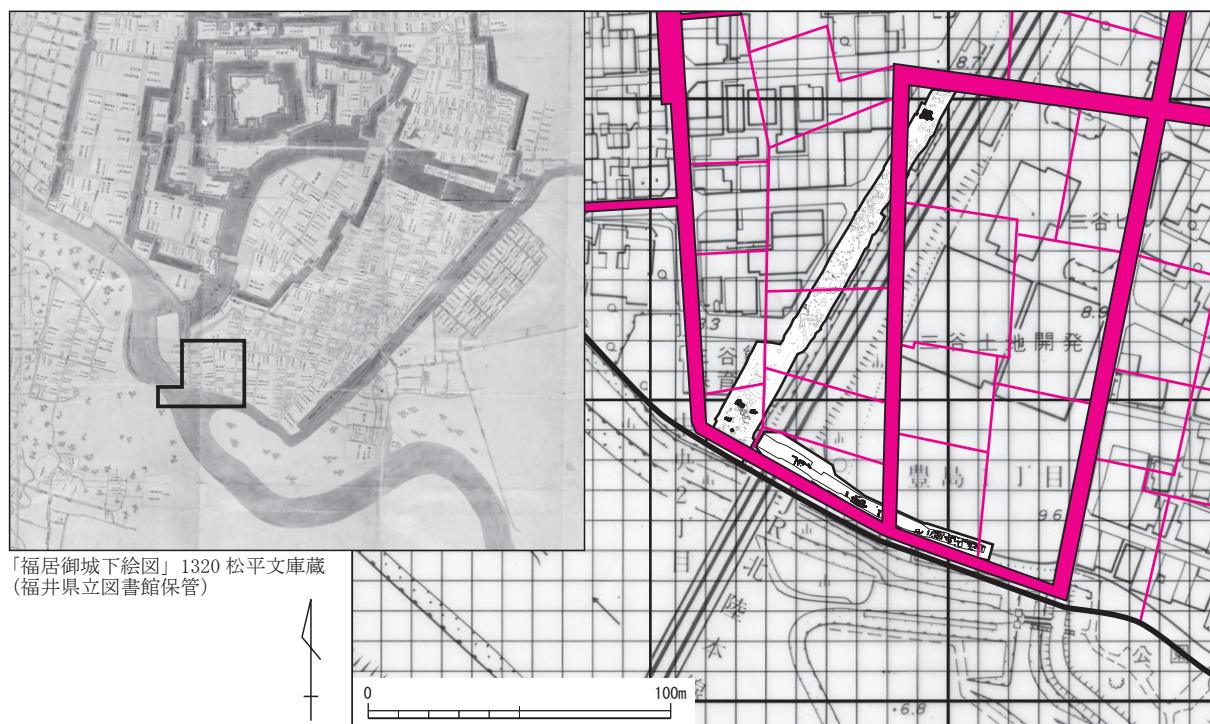
第1章 調査の経緯



第1図 調査区の位置(縮尺1/3,000万・1/300万・1/100万)



第2図 調査区の位置(縮尺1/25,000・1/3,000)



第3図 調査区と福井城の街割(縮尺約1/25,000・1/2,500)

第2章 位置と環境

第1節 調査地の位置

福井城は、福井市の中心市街地の前身である。これまでに空襲や震災などの被害を受けながらも、城郭内の諸施設や武家屋敷地、城下の町屋などがそのまま引き継がれて市街地化した。そのため、福井城として存続した頃の街割が基本的に変化していない。しかし、新たに敷設された鉄道や道路の沿線は、それらに即して改編された。今回の調査地もJR北陸本線に隣接しており、周辺の街割が福井城の頃と異なるが、線路からやや離れると以前のまま引き継がれている道路が確認できる（第2・3図）。

調査地は、足羽川と荒川の合流点北岸に位置し、福井城郭の南端に近い部分にあたる。この付近は藩の小道具方が居住したため小道具町と呼ばれていた。現存する福井城下の絵図によると、調査地周辺には北へ延びる3条の道路が確認でき、そのうち調査地の東西両側に位置する2条の道路は、現在の道路に引き継がれている（第2・3図）。中央の道路は、1998・99（平成10・11）年の高架側道5号線地点（FKJ98-8、99-1・3）の調査では北側の屈曲部付近を2地点で検出しており、今回の調査では南側の一部分を検出した。この他、5号線地点の調査区南端では足羽川右岸に沿う道路も検出したが、今回は確認できなかった。その道路は、河川との位置関係から、今回の調査区にほぼ南接するようである。

なお、足羽川と荒川は福井城築城時に流路を変更している。もとは、福井城郭中最大の堀である百間堀が荒川の旧流路（吉野川）であり、足羽川も大きく西へ迂回して九十九橋付近で吉野川と合流したと考えている。調査地周辺に流路があったとしても、これらの支流的な小規模なものとみられる。

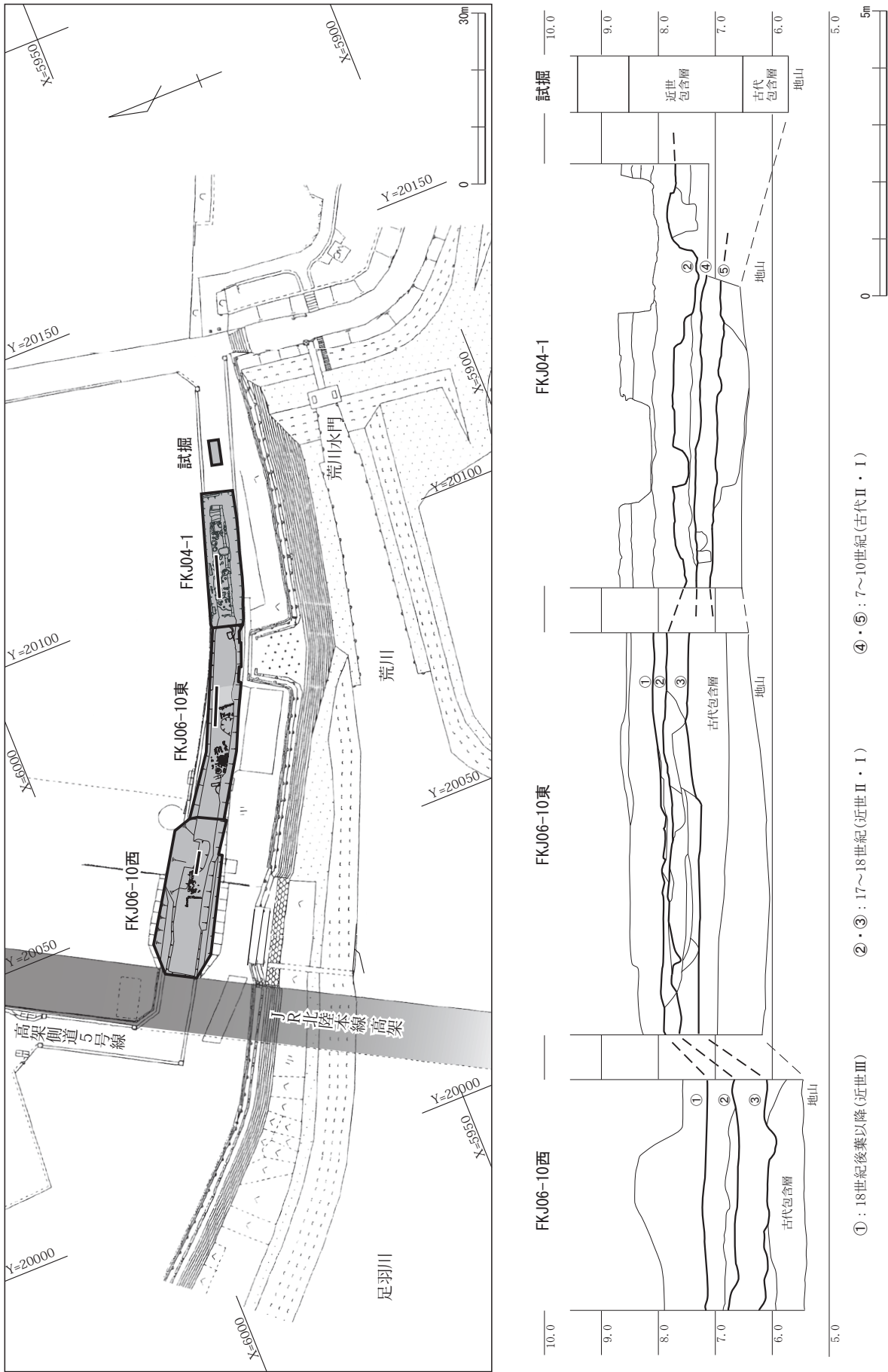
第2節 調査地の概要

今回の調査地は、試掘調査の結果などから、近世の遺構面2面以上に加え、古代の遺構面が存在することが推測されていた。しかし、削平や流出のために残存状況が一様でなく、各地点の遺構面が必ずしも対応しないことが確認された。それらを整理すると、遺構面は5面となり、①（近世Ⅲ：遺構中に18世紀後葉以降の遺物を含む。）、②・③（近世Ⅱ・Ⅰ：遺構中に17～18世紀前半代の遺物を含む。）、④・⑤（古代Ⅱ・Ⅰ：遺構中に7～10世紀の遺物を含む）に分かれる。ただし、②・③と④・⑤は、それぞれ層位的に上下関係が認められるものの、遺構出土の遺物からは時期的な区別ができない。これは、それぞれ比較的短期間のうちに局所的な削平・流出と造成がなされたことによるものと考えられる。

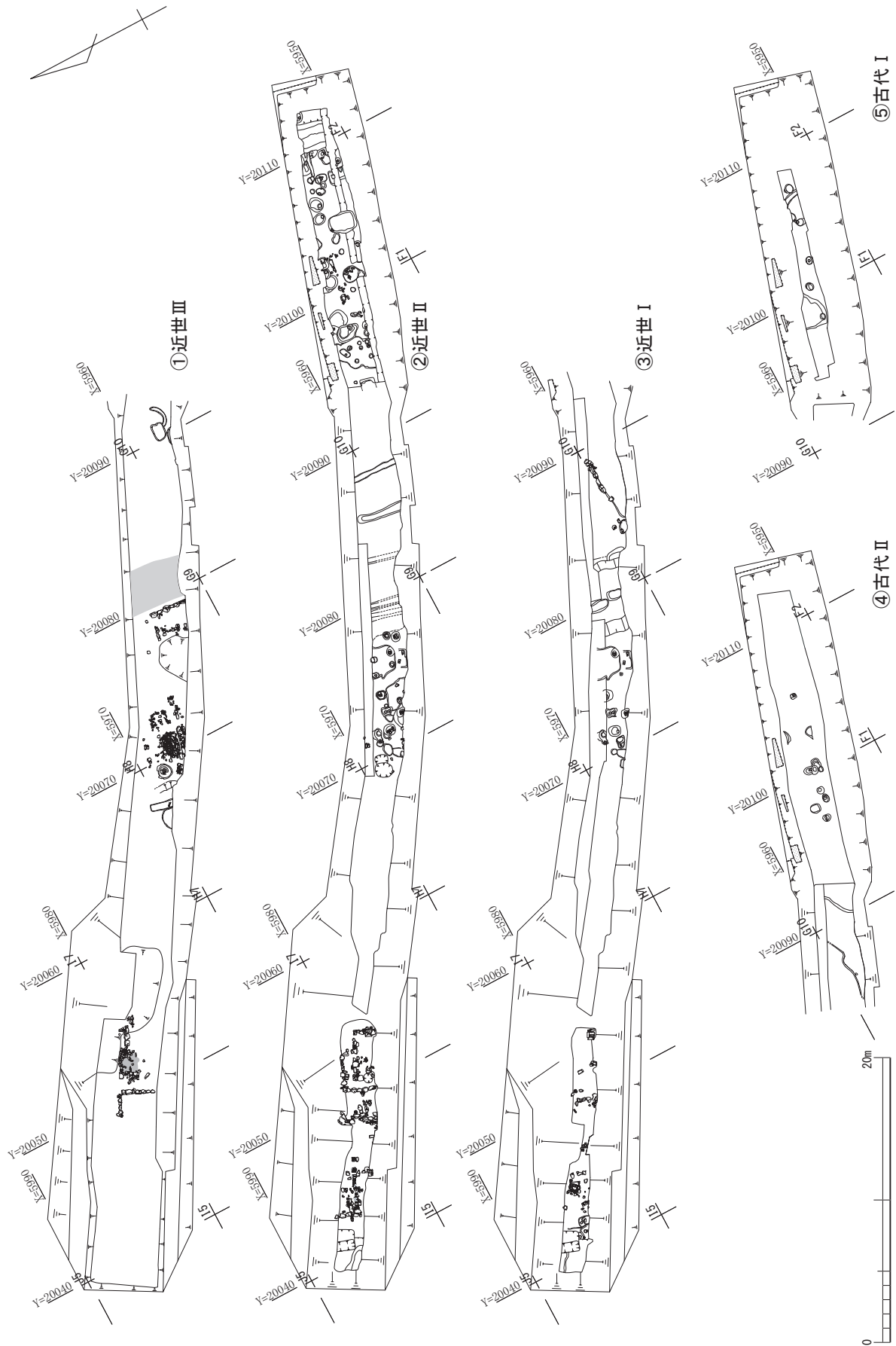
FKJ04-1地区は、遺構面②・④・⑤がある（第4・5・10図）。近世の遺構面は1面のみの検出であるが、近世の複数時期の遺構が混在するようである。古代の遺構面は2面検出した。2つの面は上下に0.5m前後の隔たりがあるが、どちらも遺構内から7世紀中葉～10世紀の遺物が出土している。

FKJ06-10東地区は、遺構面①・②・③がある（第4・5・6図）。各面の上下の隔たりは、①・②間が0.1～0.3m前後、②・③間が0.3～0.55mである。古代の遺構面は確認できないが、③の下層中に古代の遺物が包含され、③の東端付近には古代の遺物を包含する落込み堆積層が確認されている。

FKJ06-10西地区にも遺構面①・②・③があり、③の下層に古代の遺物が包含される（第4・5・9図）。各遺構面はそれぞれ東地区と対応するとみられるが、西地区の方が低く、水平距離約20mで1m前後の比高差がある。地山も同様に傾斜している。また、FKJ04-1の東側についても地山が下降することが確認されており、FKJ04-1・06-10東地区の辺りはもともと周辺よりも土地が高かったようである。



第4図 調査区配置と各調査区の遺構面(縮尺1/1,000・1/100)



第5図 調査区全体図(縮尺1/400)

第3章 遺構

第1節 近世の遺構

1 FKJ06-10東地区の遺構（第6図、第3表）

FKJ06-10東地区には道路61015がある。この道路を境に東西両側は異なる屋敷地となるが、この地区で確認される遺構はどちらの屋敷地内でも道路の方向に平行もしくは直交する。なお、この地区内では道路以東に遺構はほとんど残存しない。61004～8とG9・10石列のみが東側屋敷地の遺構である。

道路61015（図版第3、第7図） 道路61015は、南北に延びる幅約3mの砂利敷道路である。砂利敷の3回以上の嵩上げが確認されるほか、敷設時に直下を溝状に掘り込んで路盤改良したことが確認される。路盤改良の工程は、まず幅約5m・検出面からの深さ約1.2mで溝状に掘り込み（溝1）、1～5cmの石を含む土壌を西側から埋め立てた後、再び幅3.5m・検出面からの深さ約1mで溝状に掘り込んで（溝2）、1～3cmの小石を比較的多く含む土や砂質土などを交互に水平に埋め立てるというものであり、その上に路面を造成して砂利敷道路としている。道路周辺の出土遺物は主に18世紀後半以降のものであるが、砂利敷層中には17世紀後半代の遺物も含まれる。

この他、溝1の底面から土坑61030・31が検出されており、道路と同方向に直線状に並び、さらに南北へ延びるようであるため、路盤改良以前の道路に関わる遺構である可能性が考えられる。ともに埋土中から17世紀後葉～18世紀前葉の遺物が出土しており、その路盤改良は18世紀半ば頃になされたことが窺える。この道路は、慶長18年（1613）頃の状況を描くとされる「北庄家中図」（松平文庫 整理番号1309）に確認できるため、17世紀前葉以降も同じ位置にあったことがわかる。

また、溝2の西側に平行して幅約0.7m・検出面からの深さ約0.55mの溝3がある。溝3は、砂利敷道路に沿う位置関係であり、18世紀後葉以降には埋められて上層に石列が築かれる。

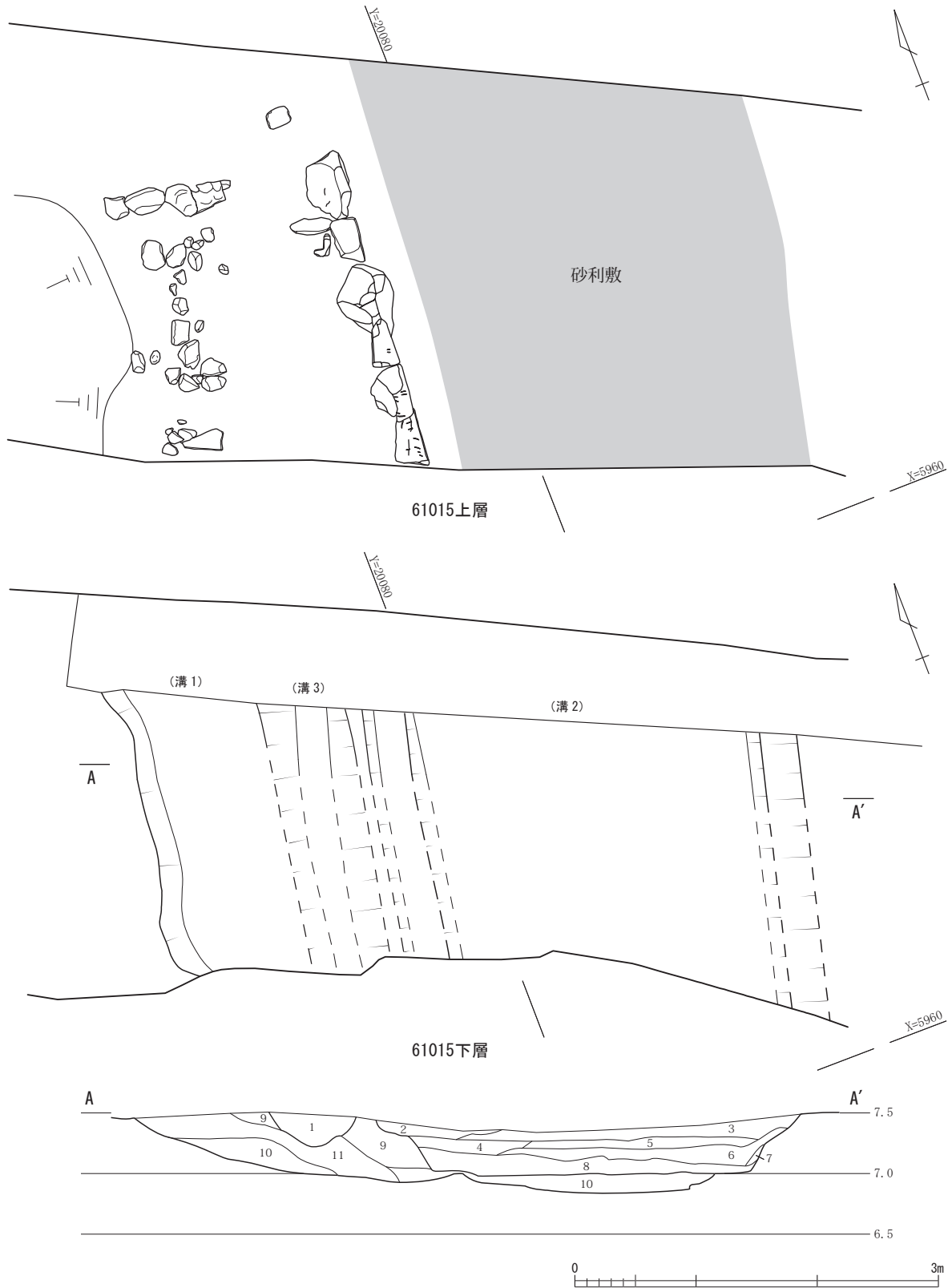
石組61003（図版第4・1・2） 道路西側の石列は北側がやや鈍角気味に屈曲し、多くの石材が脱落するものの調査区端まで直線的に延びており、建物の基礎周りを固めるものと考えられる。

石列西端部分の北側には、水路状石組・礫敷・井戸61039がある。これらは水の使用や排水のための設備であるとみられる。水路状石組は東側には続かないが、この辺りから土地が西へ傾斜し下降するため、排水路として西側へ延びることが推察される。

井戸61039（図版第4・3・4） 井筒は抜き取られ、埋土中にはタガが、掘り方底面には直径約0.55mの底板が残存した。底板には円孔があり、竹筒が差し込まれていた。いわゆる上総掘りによる自噴式の井戸とみられる。幕末に導入された可能性はあるが、上総掘りとして一般に広く普及するのは明治以降である。そのため、水に関わる一連の設備は19世紀中葉以降の遺構とするのが妥当であろう。

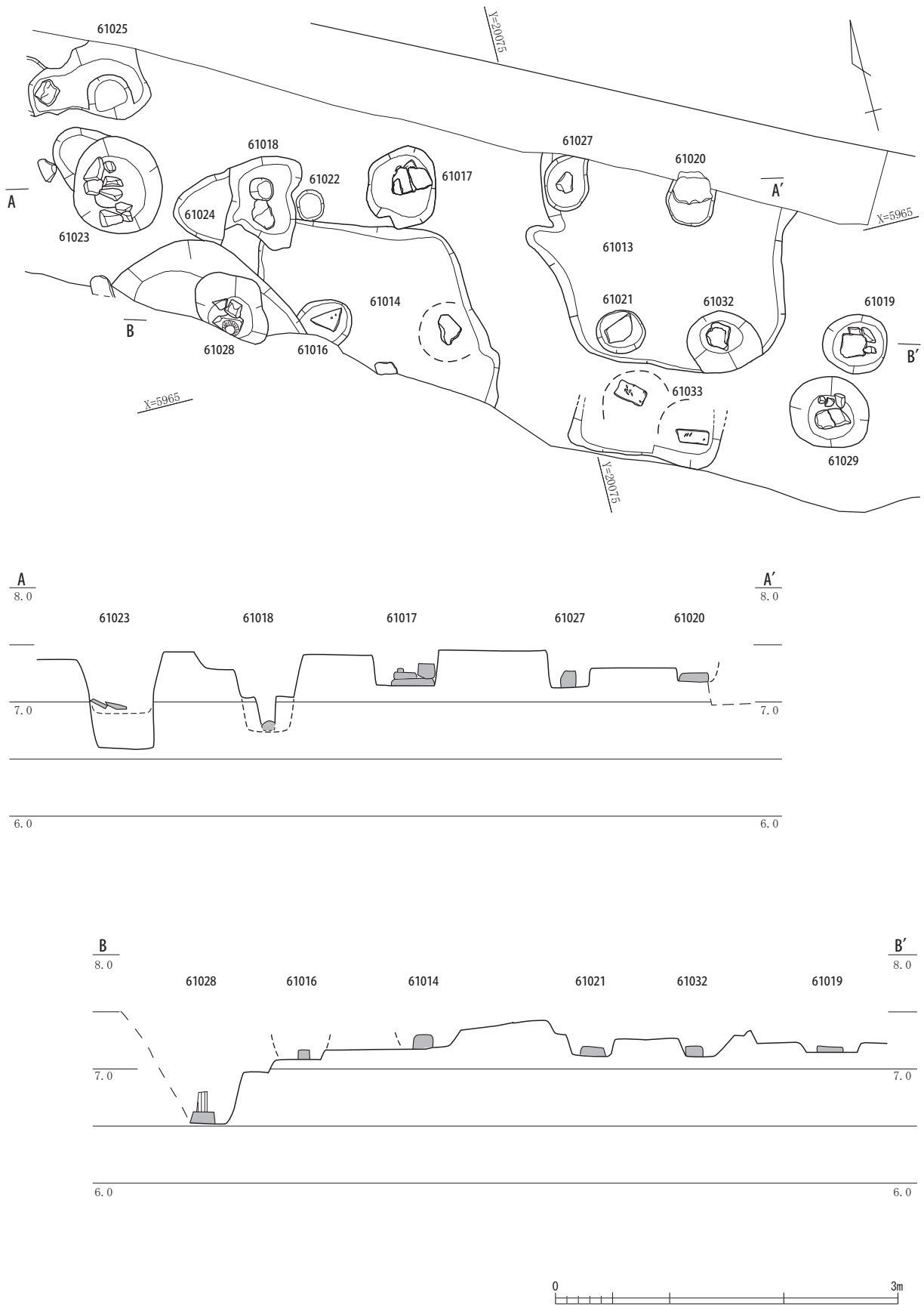
柱穴群（図版第5、第8図） 底面に礎石を据えた柱穴が10数基あり、数列に分かれて道路に直交する方向にほぼ平行に並ぶ。これらは建物などを構成するものと考えられるが、棟数など詳細は不明である。これらのうち西側の61018・23下層・28は掘り方が深く、礎石が約0.5m低い位置に据えられているため、構成する構造物の性格や存続時期などの異なる一群になることが考えられる。なお、これらの柱穴の多くは②近世Ⅱ・③近世Ⅰのいずれの遺構かに峻別することは困難であるが、61013・25・33については出土遺物が17世紀中葉以前のものに限られるため、③近世Ⅰの遺構と位置付けられる。

溝61006・7 道路東側に位置する東側屋敷地の遺構である。ともに道路とほぼ平行に延びる溝である。



- | | |
|---|---|
| 1 黄灰色粘土 (2.5Y4/1) 炭化物少量、笏谷石 (φ1~5)、石 (φ2cm) を少量含む | 7 オリーブ黒色粘質土 (2.5Y3/2) |
| 2 黒褐色砂質土 (2.5Y3/1) 炭化物少量、石 (φ1cm) を少量含む | 8 黒褐色砂 (2.5Y3/1) |
| 3 オリーブ黒色粘質土 (2.5Y3/2) 石 (φ1~3cm) を中量含む | 9 オリーブ黒色粘土 (2.5Y3/2) 炭化物少量、石 (φ2cm) を少量含む |
| 4 黒褐色砂質土 (2.5Y3/1) 石 (φ1cm) を中量含む | 10 オリーブ黒色砂質土 (2.5Y3/2) 石 (φ1~5cm) を多量含む |
| 5 黒褐色砂 (2.5Y3/1) | 11 暗オリーブ褐色粘土 (2.5Y3/2) 石 (φ1~3cm) を中量含む |
| 6 黒褐色砂質土 (2.5Y3/1) 石 (φ1cm) を多量含む | |

第7図 道路61015とその下層の溝状遺構(縮尺1/50)



第8図 柱穴列(縮尺1/50)

61006は幅0.4m前後・検出面からの深さ0.12～0.22mであり、61007は幅0.5～0.7m・検出面からの深さ0.24～0.31mである。61006に遺物はないが、61007からは17世紀後葉の遺物が出土した。

G9・10石列（図版第7-3・4） 溝61006・7の下層で検出した東側屋敷地の遺構である。道路とほぼ直交する東西方向に延びる。南側に面を揃えており、北側を基壇状に造成して建物などの基礎周りを固めたものと考えられる。その西側延長上の調査区端には1×0.5m程度の扁平な石が据えられている。その石は、略楕円形で縁に丸味を帯び、上面が平らで広いため踏み石や沓脱石のように見える。

2 FKJ06-10西地区の遺構（第9図、第3表）

FKJ06-10東地区の遺構は、いずれの時期でも道路61015と平行もしくは直交する方向性となる。しかし、FKJ06-10西地区の遺構は、③近世Ⅰ段階に確認される疎らな石列は道路61015と平行に南北に延びるが、②近世Ⅱ以降には方向性が変化して、5号線地点調査区の南端で検出した道路（第3図）と平行あるいは直交するものとなるようである。

石組61012（図版第6-4、第7-1・2） ②近世Ⅱでは、南側が調査区外となるが長方形もしくは方形の配置になるとみられる石組であり、建物の基礎となるものと考えられる。北西－南東は約3.5m、北東－南西は1.5m以上となる。北西側をL形に配した石列で区画しており、石列区画の外側よりも高く基壇状に造成して基礎の土台として固めている。

①近世Ⅲ段階には、全体が嵩上げされて、区画の西端が東へ約1m移るとともに、北西－南東の石列が南東へ約1.5m延長される。そして、下層と同じように石列の背後側が高く造成される。石列の延長部分から西側の約2×1.4mの範囲には礫敷が施され、延長した石列の東端前面に笏谷石製の方形盤（第16図19）が据えられていた。この礫敷と据えられた盤の存在は、FKJ06-10東地区の上層に認められたように、付近に井戸などの水を扱う設備の存在を想起させる。土地条件が共通しているため、同様に上総掘りによる井戸の設置が考えられ、設置時期も同様に19世紀中葉以降となるのであろう。

この他、調査区南東端に検出した石組を61012最下層として③近世Ⅰに示したが（第9図）、その方向性から②近世Ⅱ以降の遺構であることが考えられる。この石組は、南側の一部が調査区外となり不明であるが、荒割の延べ石を溜桝状に組むものである。底板として2石を敷き、その周囲に比較的小さな割石を配して、割石上に調査区外となる南側を除く三方を延べ石で囲んでいる。この石組の位置は②近世Ⅱ段階の建物基礎東南辺に重複しており、礎石の配置が乱れるように見えることを重視すると、建物廃絶後の遺構と捉えられる。ただし、その部分の大きめの石材は石組の南東側以外の三方と重なり、掘り方の三辺に沿う配置とも見え、他の石材はその内側に詰めるように配されたと思ふこともでき、いずれも比較的高さが揃うことから、むしろ建物と併存した構造物であり、先んじて埋め込んだ際に上面に礫を配して整えたという可能性も考えられる。得られた情報のみからは、この石組の詳細な時期を特定し得ない。なお、この石組を据えた土坑は上層で検出できていないが、石組の規模や②近世Ⅱの乱れたような礎石の範囲から、一辺約0.75mの歪な方形の土坑が復元できる。そして、②近世Ⅱの遺構面から石組の底板上までの深さは約0.7～0.8m、①近世Ⅲの遺構面からの深さは約1.2mである。

石組61011 ②近世Ⅱ段階には、石組61012北西にあるL形区画の北東－南西方向の石列と平行して向き合う石列があり、その石列の西側も高く造成されているため、結果的に両石列間が溝状に数十cm程度低くなる。この低くなった部分には、低平な石材を両石列と直交あるいは平行に配置したような痕跡があり、何らかの構造物に伴うものであったことが考えられる。この他、直径0.2mの範囲に集中する砂利集積が確認されているが、詳細は不明である。



第9図 遺構配置図②(縮尺1/100)

①近世Ⅲ段階には、全体が嵩上げされて改変される。下層では石組61012北西にあるL形区画の北東－南西方向の石列であった位置に、新たな石列を設けている。ただし、上下の石列間には数十cmの造成土があり、接していない。この新たな石列は北側で屈曲し、北西へ約1.5m延びる。北西端の石材は、平面形がこの石列とは逆方向に屈曲するL形であり、北西側にも成形された面をもつことから、石列はここで再び屈曲してさらに北東に延びることが考えられる。この石列の東側は高く造成される。

石組61010（図版第6-1～3） 周辺からの出土遺物が17世紀後半～18世紀前葉のものであることから、②近世Ⅱ段階に位置付けた。石組は、比較的大形の石材を使用してL形に配置する部分、石製丸瓦などを通路状に直線的に並べた部分などからなる。L形配置の石列は、北東－南西方向に約1.2m、その南端で屈曲して南東へ約1m延びる。この北東－南西部分は北西側の面を、北西－南東部分は北東側の面を揃えており、それぞれ背後を高く造成する。通路状石列は、石製丸瓦だけでなく、大きさや形の揃った割石や川原石、他の転用石材を使用しており、長辺が接するように丁寧に並べている。

また、この通路状石列の南側に接するように、礎石とみられる扁平な石材4石が1m前後の間隔で配置されている。L形石列の正面観や通路状石列の位置から、礎石列より南側に建物の本体があったものと考えられる。この他、4石の礎石列と直交する礎石列がある。その礎石列は、通路状石列の石材が抜けた部分で交差して配置されており、他の礎石列などよりやや浮いた状態で検出されたことから、建物の改変時に新たに設置されたものであることが考えられる。

61010下層には、扁平な石材や円礫などを略方形に組んで上面を平らに整えた石組（図版第6-3、第9図）があるが、その方向性などから本来は②近世Ⅱの遺構であることが考えられる。ただし、この石組は、通路状石列の下に入り込み、4石の礎石列の約0.15m北側にて南辺をその礎石列と平行に揃える位置関係であるため、建物と一時併存したとしても、軒下に通路状石列を敷設する際には埋め込まれたものとみられる。石組は一辺0.8m前後で、その上面は周囲より0.2m程度低い。石組の北東には円礫などの集積が带状に延び、調査区外へと続くことが確認できる。これについては調査時にトレンチで切断しており面的な検出ができなかったが、それは導水路のようなものかもしれない。また、石組部分を土台として石製盤などを据えた可能性はあるが、その痕跡は残らない。

土坑61001・2 調査区西端に位置する土坑61001・2は、絵図や周辺での調査成果から西側屋敷地の西側の屋敷境に関わることが考えられるが、大部分が調査区外になるものとみられ、詳細は不明である。61001は埋土中に含まれる遺物が17世紀後葉のものに限定されるため、その頃には人為的に埋められたことが考えられる。また、両者は上層にて重複しており、61002が後出であることが明らかである。そのため、土坑61001・2は、17世紀後葉～18世紀前葉頃の屋敷境の変化に対応するのであろうが、絵図に認められる屋敷境とは方向が一致しないため、屋敷境溝そのものではないようである。

3 FKJ04-1地区の遺構（第10図、第2表）

FKJ04-1地区で確認された近世の遺構面は1面のみである。しかし、埋土中出土の遺物が17世紀前半代のものに限られる遺構が複数確認されたことや、逆に18世紀後半以降の遺物を含む遺構がほとんど確認されないことから、本来存在した複数の生活面が削平や造成のために失われたものと考えられる。

なお、この地区の東端にて屋敷境になるものとみられる溝を検出した。FKJ06-10東地区では道路を検出しており、FKJ06-10西地区の西端付近には屋敷境の存在が考えられることから、細長い帯状ではあるが、道路を挟む東西両屋敷地の端から端までをおおよそ確認したこととなる。

溝4164（図版第2-4） 幅1.6m前後、検出長2.2m分、検出面からの深さ0.8mであり、ほぼ南北方向

に延びる。出土遺物が18世紀後葉～19世紀以降のものであり、廃絶時の遺物しか含まれていないと言え、幕末までの存続期間中は整備が行き届いていたようである。

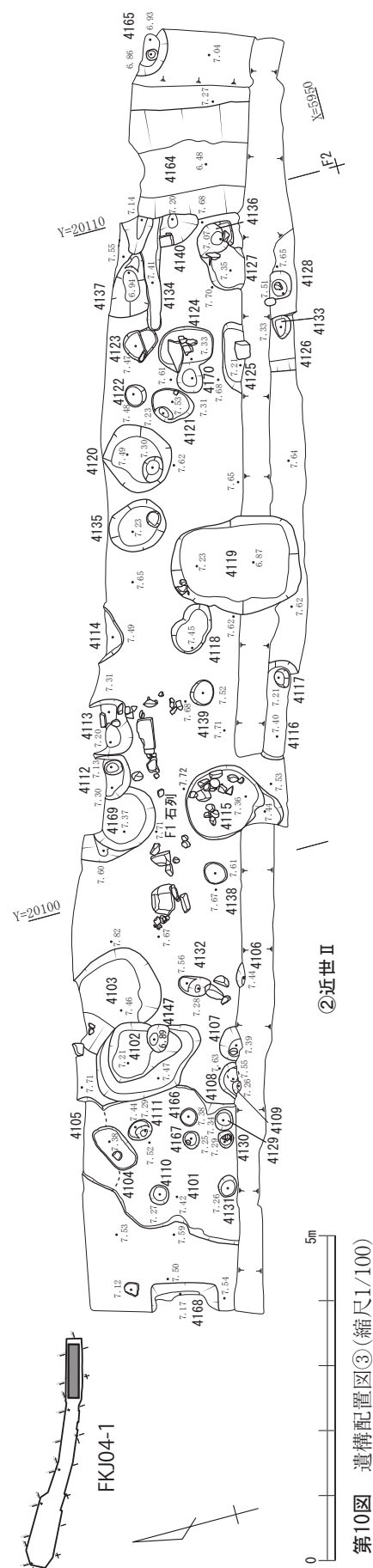
F1石列（図版第2-1） この地区のほぼ中央に位置し、東西方向に並ぶ石列である。石材の多くが抜けているが、南側に面を揃えることが確認される。この石列は北側に穿たれた土坑4112・13・69に破壊されており、4112・13の出土遺物が18世紀前葉のものに限定されることから、この石列はそれ以前に機能したものとなる。なお、調査時に、この石列の北側が高まり、その上面に砂利が敷かれていたことが確認されている。

柱穴4124・4140（図版第1-1） とともに上面が平らな石がある。4124は0.45×0.2m程度の歪な割石であり、4140は0.2×0.15m程度の整形された石材が転用される。石上面の高さはほぼ揃う。石の中心間は1.65m前後であり、溝4164とほぼ直交して並ぶ。4140に遺物は伴わないが、4124は18世紀後葉の遺物が出土している。ともに土坑底面からやや浮いた状態で石を据えているが、建物などを構成する礎石になるものと捉えた。

柱穴4125（図版第1-1） トレンチのために土坑の南側半分を検出できなかった。土坑底面に1辺約0.25mの扁平な石を据えている。この位置は、柱穴4124・40と近いものの、礎石上面の高さが大きく異なり、4125の出土遺物が16世紀後葉～17世紀初頭のものに限定されることから、同一の建物を構成するものではないと言える。なお、出土遺物が17世紀中葉以前ののものに限定される遺構は、4125の他に4119・22・37・39のみである。

土坑4101（図版第2-1） 不定形の浅い掘り込みである。底面に直径0.3～0.5m程度の柱穴状の土坑が複数ある。それらの柱穴状土坑は、一つの構造物を構成するものではないようである。また、4101とそれらの柱穴状土坑との関係も不明である。柱穴状土坑にはいずれも出土遺物がないが、4101の埋土中からは完形の土師皿を含む18世紀前葉の遺物が出土した。土師皿は重ねて廃棄したものが散乱した状況を示す出土状況であったため、4101が廃棄土坑として掘られたのであれば、その底面で検出した柱穴状土坑の時期は17世紀代に上がる可能性がある。

土坑4119（図版第2-2） 平面形が歪な隅丸長方形で、南北1.97m・東西1～1.5m・検出面からの深さ約0.8mである。埋土上層に砂利が落ち込み層をなすが、中層以下には粘質土が堆積し、砂利は含まれない。出土遺物は、完形の土師皿などを含む17世紀初頭～中葉までのものが下層から出土した。

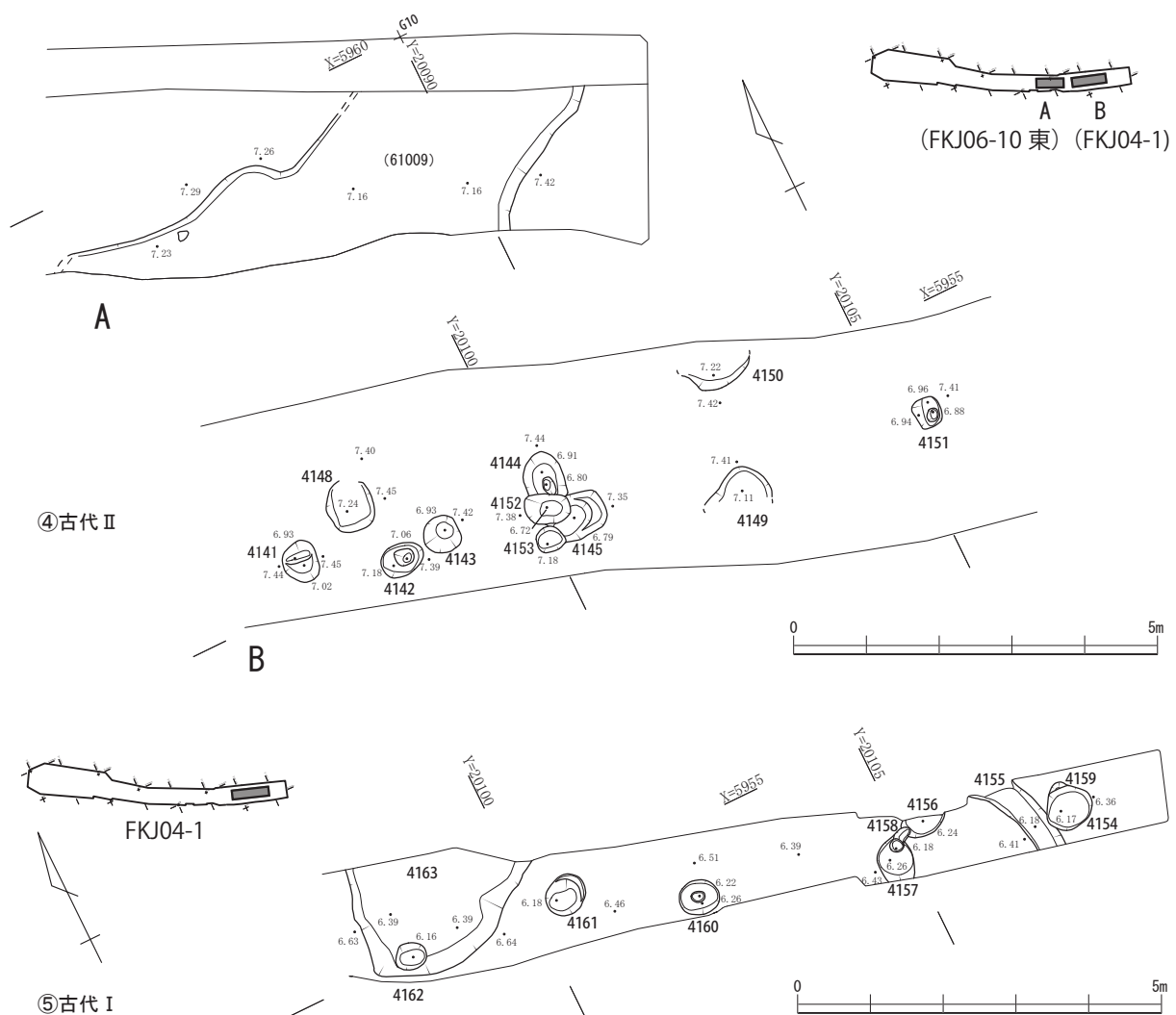


第2節 古代の遺構

古代の遺構面はFKJ04-1地区で2面確認した。調査深度が深く、調査可能範囲が非常に狭くなったため（図版第8、第5・11図）、遺構の個々の性格や面的な分布状況を把握するには至らなかった。

④古代Ⅱ段階の遺構はFKJ04-1地区に11基の土坑がある。このうちの3基以外に出土遺物があるが、いずれも細片であり、時期の異なるものが混在する。土坑4153は7世紀中葉の蓋片のみが出土するが、それだけではこの遺構面の時期を確定できない。このほか、FKJ06-10東地区の③近世Ⅰ段階のG9・10石列東側に、不定型な落ち込み（61009）があり、その堆積土中には10世紀頃とみられる須恵器坏片・土師器碗片が含まれていた。これは、③近世Ⅰの遺構面造成時、すなわち福井城築城時に削り残された古代の遺構の残欠である可能性もある。おそらく、これは④古代Ⅱ段階の遺構となるものと考えられ、④古代Ⅱを10世紀頃の遺構面とすることも可能ではあろうが、確定的ではない。

⑤古代Ⅰ段階の遺構はFKJ04-1地区に9基の土坑・溝がある。遺物を伴う遺構が少なく、あったとしてもほとんどが土師器の細片である。土坑4163のみ、7世紀中葉の須恵器片・土師器片が時期的にも量的にも比較的まとまって出土した。このような状況から確定はし得ないが、⑤古代Ⅰを7世紀中葉の遺構面と看做すことは可能である。



第11図 遺構配置図④(縮尺1/100)

第2節 古代の遺構

第2表 遺構一覧表①

遺構 番号	面	グリッド	計測値(m)			種別	主な遺物による 遺構の時期	備考
			長辺	短辺	深さ			
4101	②	F10	(2.40)	2.29	0.14	土坑	18c前葉	土】皿 唐】京風碗、青磁皿、飴釉碗、二彩香炉？ 伊】青磁大皿 越】播鉢
4102	②	F10	1.70	1.20	0.46	土坑	17c中～18c後	土】皿 唐】青磁皿、呉器手碗 伊】皿、鉢、碗 信】壺？ 瀬(陶)】天目碗、志野鉢 越】甕、播鉢
4103	②	F10	(1.50)	1.21	0.33	土坑	17c中～18c前	土】皿 瀬(陶)】織部筒碗？、灰釉稜皿 伊】碗、皿 唐】青磁大皿、碗 朝？】青磁刷毛目平碗
4104	②	F10	0.77	0.43	0.17	土坑		
4105	②	F10	(1.30)	(0.40)	0.18	土坑		
4106	②	F10	(0.37)	—	(0.18)	柱穴		
4107	②	F10	0.52	0.34	0.28	柱穴		
4108	②	F10	0.30	0.30	0.08	柱穴		
4109	②	F10	0.57	0.30	0.37	柱穴		
4110	②	F10	0.32	0.30	0.15	柱穴		
4111	②	F10	0.38	0.30	0.23	柱穴		
4112	②	F1	0.70	0.38	0.66	柱穴	18c前	土】皿 唐】刷毛目皿 越】播鉢
4113	②	F1	0.87	0.41	0.57	柱穴		
4114	②	F1	0.74	0.28	0.16	柱穴		
4115	②	F1	1.52	1.21	0.36	土坑	17c後	土】皿 伊】碗、皿、白磁小坏、白磁碗 唐】呉器手碗、飴釉碗 越】播鉢
4116	②	F1	1.54	0.22	0.27	土坑		
4117	②	F1	0.30	0.22	0.23	柱穴		
4118	②	F1	0.81	0.54	0.21	土坑	17c中～後	土】皿 中】染付碗
4119	②	F1	1.97	1.50	0.75	土坑	17c初～中	土】皿 唐】碗 瀬(陶)】天目碗、灰釉碗 越】播鉢
4120	②	F1	1.07	1.07	0.32	土坑	17c後～18c前	土】皿
4121	②	F1	0.67	0.52	0.42	柱穴		
4122	②	F1	0.35	0.33	0.15	柱穴	17c初	唐】絵付皿
4123	②	F1	0.54	0.45	0.12	柱穴		
4124	②	F1	0.86	0.58	0.31	柱穴	18c後	土】皿 伊】碗 越】播鉢 瓦】だるま
4125	②	F1	1.08	0.34	0.41	柱穴	16c後～17c初	土】皿 越】播鉢
4126	②	F1	0.78	0.38	0.02	土坑		
4127	②	F1	0.37	0.27	0.33	土坑	17c後	土】皿 伊】碗、白磁小坏 中】白磁皿 唐】呉器手碗 瀬(陶)】灰釉碗 土師器片
4128	②	F1	0.45	0.33	0.14	柱穴		
4129	②	F10	0.31	0.28	0.12	柱穴		
4130	②	F10	0.27	0.24	0.17	柱穴		
4131	②	F10	0.32	0.28	0.19	柱穴		
4132	②	F10	0.50	0.30	0.34	柱穴		
4133	②	F1	0.35	0.28	0.33	柱穴		
4134	②	F1	1.75	0.22	0.23	溝		
4135	②	F1	0.90	0.75	0.27	土坑		
4136	②	F1	0.58	0.47	0.50	柱穴		
4137	②	F1	0.95	0.53	0.623	土坑	17c前～中	土】皿 伊】白磁袴腰香炉 唐】青磁碗、皿 信】茶壺
4138	②	F1	0.33	0.33	0.06	柱穴	18c後	伊】碗
4139	②	F1	0.40	0.37	0.17	柱穴	17c中	土】皿 越】播鉢
4140	②	F1	0.60	0.50	0.47	柱穴		
4141	④	F10	0.57	0.48	0.52	柱穴	古代	須恵器片 土師器片
4142	④	F10	0.61	0.43	0.37	柱穴		
4143	④	F10	0.51	0.50	0.49	柱穴		
4144	④	F1	0.61	0.55	0.64	土坑	古代	土師器片
4145	④	F1	0.85	0.61	0.52	土坑	古代	須恵器片 土師器片
4147	②	F10	0.43	0.30	0.51	柱穴	17c前～中	土】皿
4148	④	F10	0.72	0.60	0.21	柱穴	？	土師器片
4149	④	F1	0.95	0.47	0.30	土坑		
4150	④	F1	0.92	0.27	0.20	土坑	古代？	須恵器片
4151	④	F1	0.40	0.37	0.54	柱穴	？	土師器片
4152	④	F10	0.65	0.41	0.63	柱穴	古墳？	土師器片
4153	④	F10	0.40	0.35	0.19	柱穴	7c中葉	須恵器蓋
4154	⑤	F1	0.68	0.67	0.19	柱穴	？	土師器片
4155	⑤	F1	1.10	0.40	0.23	溝	古代？	土師器片
4156	⑤	F1	0.62	0.28	0.21	柱穴		
4157	⑤	F1	0.62	0.50	0.17	柱穴		
4158	⑤	F1	0.20	0.15	0.22	土坑		
4159	⑤	F1	0.28	0.10	0.10	柱穴		
4160	⑤	F1	0.55	0.48	0.29	柱穴	古代？	土師器片
4161	⑤	F1	0.61	0.49	0.30	柱穴	古墳？	土師器片
4162	⑤	F10	0.43	0.38	0.47	柱穴		
4163	⑤	F10	2.55	1.62	0.24	土坑	7c中葉	須恵器坏、蓋、甕体部片 土師器甕、坏 弥生土器
4164	②	F2	2.20	1.60	0.80	溝（屋敷境）	18c後～19c	土】皿 伊】皿、小坏、鉢、碗 中】白磁小坏、染 付小坏、染付皿 唐】呉器手碗、刷毛目碗、灰釉碗 瀬(陶)】天目碗、志野丸碗、灰釉段天目碗、鉢 信】煎じ碗、小坏 越】播鉢、壺、鉢 遊具】鉄釉五重塔箱庭 瓦】赤(棟)、だるま 須恵器坏・壺、土師器甕
4165	②	F2	0.65	0.36	0.36	土坑	(17c後・)18c後	土】皿 伊】碗、水滴 唐】絵付皿、呉器手碗 越】播鉢 瓦】だるま 石】砥石
4166	②	F10	0.27	0.25	0.13	柱穴		
4167	②	F10	0.25	0.25	0.23	柱穴		
4168	②	F10	1.05	0.43	0.33	土坑		
4169	②	F1	0.95	0.90	0.34	土坑		
4170	②	F1	0.40	0.40	0.35	柱穴		

第3表 遺構一覧表②

遺構 番号	面	グリッド	計測値(m)			種別	主な遺物による 遺構の時期	備考
			長辺	短辺	深さ			
61001	③	I4	(0.87)	(0.50)	0.18	土坑	17c後 (寛文大火後)	土】皿 伊】輪火皿、色絵鶏水滴、碗 色絵口寄香炉 中】青磁碗 唐】素焼皿、鉢 瀬(陶)】天目碗 越】播鉢 瓦】黒(丸・平) 弥生土器 石】硯
61002	③	I4	(1.88)	(0.80)	0.38	土坑	17c中～18c	土】皿 伊】鉢、碗 瀬(陶)】天目碗
61003	①	G8	(1.90)	(1.90)	-	石組	18c後～19c (攪乱含む)	土】皿 伊】鳥形水滴、腰張碗、半球碗、小坏 唐】呉器手碗 信】煎じ碗 越】播鉢、甕 瓦】黒(丸・平)、赤(丸・平・棟)、だるま(棧・軒棧) 金】寛永通寶 石】棟瓦、盤
61004	①	F9	1.23	0.87	0.22	土坑	19c～	土】皿 伊】皿 信】半球碗
61005	①	F10	(1.10)	0.28	0.14	溝	18c後～19c	土】皿
61006	②	F9	(3.15)	0.47	0.22	溝		
61007	②	G9	(3.18)	0.68	0.24	溝	17c後	土】皿 伊】皿 唐】筒碗
61008	①	F9	(1.22)	(0.19)	0.39	土坑	17c前～中	土】皿
(61009)	④	F9	6.22	(4.86)	0.22	落込(堆積土)	10c?	須恵器坏、土師器碗
61010	② ③	I5	-	-	-	石組	17c後～18c前	土】皿 伊】皿、青磁碗、白磁碗、鉢 唐】絵付向付 瓦】赤(丸・平)、黒(丸) 金】寛永口寶 石】丸瓦・軒丸瓦・棟瓦
61011	① ② ③	I5	-	-	-	石組	18c	土】皿、土錘 伊】青磁大皿、碗、筒碗 唐】緑釉皿、京風碗、刷毛目皿、砂目皿、呉器手碗 信】平鉢 越】播鉢 瓦】黒(丸・平)、赤(丸)、だるま 金】頭巻釘
61012	① ② ③	H6	-	-	-	石組	17c中～19c	土】皿、土錘 伊】皿、小坏、鉢 中】染付小坏 唐】絵付皿、飴釉瓶、片口鉢 瀬(陶)】天目碗、緑釉火鉢 越】播鉢、甕、鉢 瓦】黒(平)、赤(丸) 石】丸瓦・軒丸瓦・棟瓦、行火、盤、重石、硯
61013	②	G8	2.00	(1.70)	0.17	土坑	17c初 (攪乱含む)	土】皿 唐】皿 瀬(陶)】織部向付、天目碗 越】播鉢
61014	②	G8	1.80	(1.20)	0.16	土坑	17c後～18c前	土】皿 越】播鉢 瓦】黒(平)
61015	① ②	G9	(2.05)	5.48	0.44	道路	18c後～19c (道路は17c後 から存続)	道路幅3.56m 土】皿 伊】端反小坏、瓶、碗、鉢、皿、小坏 唐】二彩大皿、刷毛目大皿、飴釉瓶、錯釉瓶、刷毛目碗 瀬(陶)】鎧手火鉢? 信】錯絵付人形、半球碗、色絵小碗 越】甕、播鉢、鉢 瓦】だるま 金】煙管(雁首) 石】砥石
61016	②	G8	(0.43)	0.35	0.10	砂利土坑	17c中～後	土】皿 伊】色絵水滴 唐】青磁碗
61017	②	G8	0.75	0.58	0.32	柱穴	17c?	土】焼塩壺、皿
61018	②	G8	0.82	0.53	0.58	柱穴	17c後	伊】色絵水滴 瀬(陶)】鉄釉瓶 越】甕
61019	②	G8	0.57	0.53	0.10	柱穴		
61020	②	G8	0.41	(0.36)	0.38	柱穴		
61021	②	G8	0.41	0.39	0.30	柱穴		
61022	②	G8	0.27	0.23	0.10	柱穴	17c後	土】皿 越】播鉢
61023	② ③	G8	0.85	0.75	0.82	柱穴	17c後	土】皿 伊】白磁皿 唐】播鉢 瀬(陶)】小天目碗
61024	②	G8	0.58	(0.45)	0.14	柱穴		
61025	②	G8	1.01	0.75	0.45	柱穴	17c中	伊】碗
61026	②	G8	(0.48)	0.45	0.04	柱穴		
61027	②	G8	0.49	0.39	0.33	柱穴		
61028	②	G8	1.76	(0.70)	0.91	柱穴		
61029	②	G8	0.70	0.62	0.52	柱穴	17c後	土】皿 伊】碗、白磁小坏、青磁皿 唐】呉器手碗
61030	③	G9	(1.30)	0.80	0.62	土坑(溝状)	17c後～18c前	土】皿 伊】碗 唐】絵付け皿 越】播鉢、甕 金】寛口寶
61031	③	G9	(1.06)	0.68	0.61	土坑(溝状)	17c後～18c前	土】皿 伊】皿、蕎麦猪口 唐】刷毛目皿 越】甕
61032	②	G8	0.58	0.55	0.28	柱穴	17c初	土】皿 唐】碗
61033	② ③	G8	1.20	(0.32)	0.46	柱穴	17c初～前	土】皿 唐】鉄釉甕? 石】鬼瓦など
61034	③	G9	1.40	(0.62)	0.53	土坑	18c後	伊】筒碗 越】播鉢
(61035)		I5	-	-	-	落込(造成土)	18c前	土】皿 伊】腰張碗、碗 中】漳州窯大皿 唐】皿
61036	③	I5	(0.80)	0.66	0.36	土坑	17c初～後?	土】皿 伊】瓶? 唐】青磁皿
61037	③	I5	(0.90)	(0.74)	0.20	土坑	17c	土】皿 唐】青磁皿、呉器手碗
61038	①	H7	(1.11)	0.55	0.44	溝	17c後～19c中	土】皿 伊】端反碗、陶胎染付皿 唐】青磁碗 瀬(陶)】灰釉碗、鉄釉碗? 信】茶壺? 越】播鉢、甕 瓦】だるま
61039	①	H7	1.10	1.07	1.34	井戸	19c前	土】皿、七輪 伊】皿、小坏 唐】呉器手碗 越】播鉢、鉢 須恵器坏 金】匙など 石】鉢
(61040)		G7	-	-	-	落込(造成土)		
61041	①	G7	1.46	(0.87)	1.16	井戸	19c中～	土】皿 伊】端反碗 越】甕 瓦】だるま
61042	③	G8	0.80	0.60	0.65	柱穴		
61043	②	G8	0.86	0.67	0.20	柱穴		
61044	②	G7	0.66	(0.60)	0.19	柱穴		
61045	③	G7	0.60	(0.22)	0.28	柱穴		
61046	③	G8	0.22	0.21	0.18	柱穴		
61047	③	I5	(0.84)	0.38	0.16	溝		
(61048)		G8				柱穴		不明
61049	③	G8	0.44	0.40	0.30	柱穴		
61050	③	G8	0.80	(0.34)	0.56	柱穴		

※第2・3表の主な出土遺物は、以下の略称を使用した。

土】←土師質土器 伊】←伊万里焼 唐】←唐津焼 瀬(陶)】←瀬戸美濃焼陶器 信】←信楽焼
越】←越前焼 中】←中国陶磁器 朝】←朝鮮陶磁器 金】←金属製品 石】←石製品

第4章 遺物

第1節 土器・陶磁器（図版第9・10、第12・13図、第4表）

遺構及び包含層から出土したもの78点を図化した。肥前、瀬戸・美濃などをはじめ、在地系の土師質皿・播鉢などが出土している。以下、17世紀の遺構を中心に概要を述べる。

土坑4101（第12図） 401- 1・2・3は在地系土師質皿C系である⁽¹⁾。底部に板状圧痕が付く。4はD系である。5はK系であり、強いナデで口縁部直下に段が付く。底部はやや平面である。

土坑4102（第12図） 402- 1は越前焼の播鉢である。口縁部断面三角形で、VI- 1期に分類される⁽²⁾。

土坑4103（第12図） 403- 1は伊万里の染付碗（底部）である。高台内に「太明」と書く。II- 2期～III期に分類される⁽³⁾。2は土師質皿C系である。3はD系である。4はI系でコースター状に扁平に成形される。磨滅しているためナデの方法は不明であるが、口縁端部は弱くつまむ。灯芯油痕がある。

柱穴4112・13（第12図） 412- 1は唐津の皿である。ハケによる白泥が施され、見込蛇の目釉剥ぎで、灰釉が施釉される。口縁部は無釉である。IV期に分類される。

土坑4115（第12図） 415- 1は伊万里の染付碗である。2は上絵付のある蓋付の碗と思われるが、絵付は全て剥離している為、図化していない。3は染付皿である。全てIII期に分類される。4は越前焼の播鉢であり、VI- 2期に分類される。5・7はD系の土師質皿で、6はK系である。

土坑4119（第12図） 419- 1は越前焼の播鉢である。VI- 1期に分類される。2は土師質皿のC系であり、3・4は見込に圈線を持つE系である。いずれも灯芯油痕が確認できる。

土坑4137（第12図） 437- 1は唐津の灰釉碗である。高台は無釉である。2は土師質皿のE系である。

溝4164（第12図） 464- 1は伊万里の染付碗である。2は瀬戸・美濃の天目茶碗である。鉄釉が施釉される。登窯期に分類される⁽⁴⁾。3は志野丸皿である。長石釉が施釉され、見込にピン痕が残る。大窯期に分類される。4・5・7は唐津である。4は碗で、緑釉と灰釉を掛け分ける。5は灰釉皿である。見込みに胎土目積みの痕が残る。7は灰釉皿である。ロクロ成形のち口縁部は輪花状に形成する。砂目痕が残り、見込の釉縮みが激しい。6は瀬戸の鉢である。8は破片であるが、織部である。銅緑釉を流し掛け、鉄絵を施す。9は玩具の五重塔で、鉄釉が施釉される。10・11は越前焼の播鉢で、VI期～VII期である。11は素焼状で軟質である。12～15は土師質皿である。12は口縁部不成形のA系である。13～15はC系である。陶磁器類はI期～IV期に分類され、遺構内の時期差が大きいことが判る。

土坑4165（第12図） 465- 1は唐津の灰釉皿である。I期に分類される。2は土師質皿C系である。3～5はE系である。2・4は灯芯油痕が確認できる。

土坑61001（第12図） 601- 1は鳥形の水滴である。型押し成形で、赤・緑の上絵付が施される。2は伊万里の香炉である。赤・黒・黄・緑で絵付が施される。3は唐津の小皿である。無釉で、底部回転糸切り痕未調整である。4は土師質皿のC系である。5はD系であり、共に灯芯油痕が確認できる。

石組61003（第13図） 603- 1は越前焼の播鉢である。端部は丸く、櫛目は細かい。VIII期に分類される。

石組61010（第13図） 610- 1は玩具の白磁碗である。2は伊万里の染付中皿で、暈付に砂が熔着する。3は越前焼の播鉢である。外面に厚く赤土を塗る。4は産地不明の灯明皿である。ロクロ成形された焼締め陶器であり、器壁は薄い。口縁部端部に灯芯油痕が確認できる。

道路61015（第13図） 615- 1は人形である。型押し成形され、鉄絵で髷または総髪の男性を描く。

石組61011（第13図） 611- 1は唐津の灰釉碗である。畳付は無釉である。2は唐津の緑釉皿である。見込蛇の目釉剥ぎで砂目積み痕が確認できる。3・4は越前焼の播鉢で、Ⅵ期とⅦ期に分類される。5は土師質皿で、C系である。6は土師質受け皿である。E系の土師質皿に把手を貼り付けたものである。

柱穴61022（第13図） 622- 1は越前焼の播鉢である。Ⅵ期に分類される。

柱穴61023（第13図） 623- 1は唐津の播鉢である。口縁部にのみ鉄釉を施釉する。

造成土61035（第13図） 635- 1は唐津の緑釉皿である。外面は無釉であり、見込は蛇の目釉剥ぎである。Ⅳ期に分類される。2は土師質皿でD系である。灯芯油痕がある。

溝61038（第13図） 638- 1は伊万里の染付碗である。薄い呉須で松を描く。Ⅱ- 1期に分類される。2は伊万里の陶胎染付皿である。破片であるが、内面に薄い唐草文が確認できる。

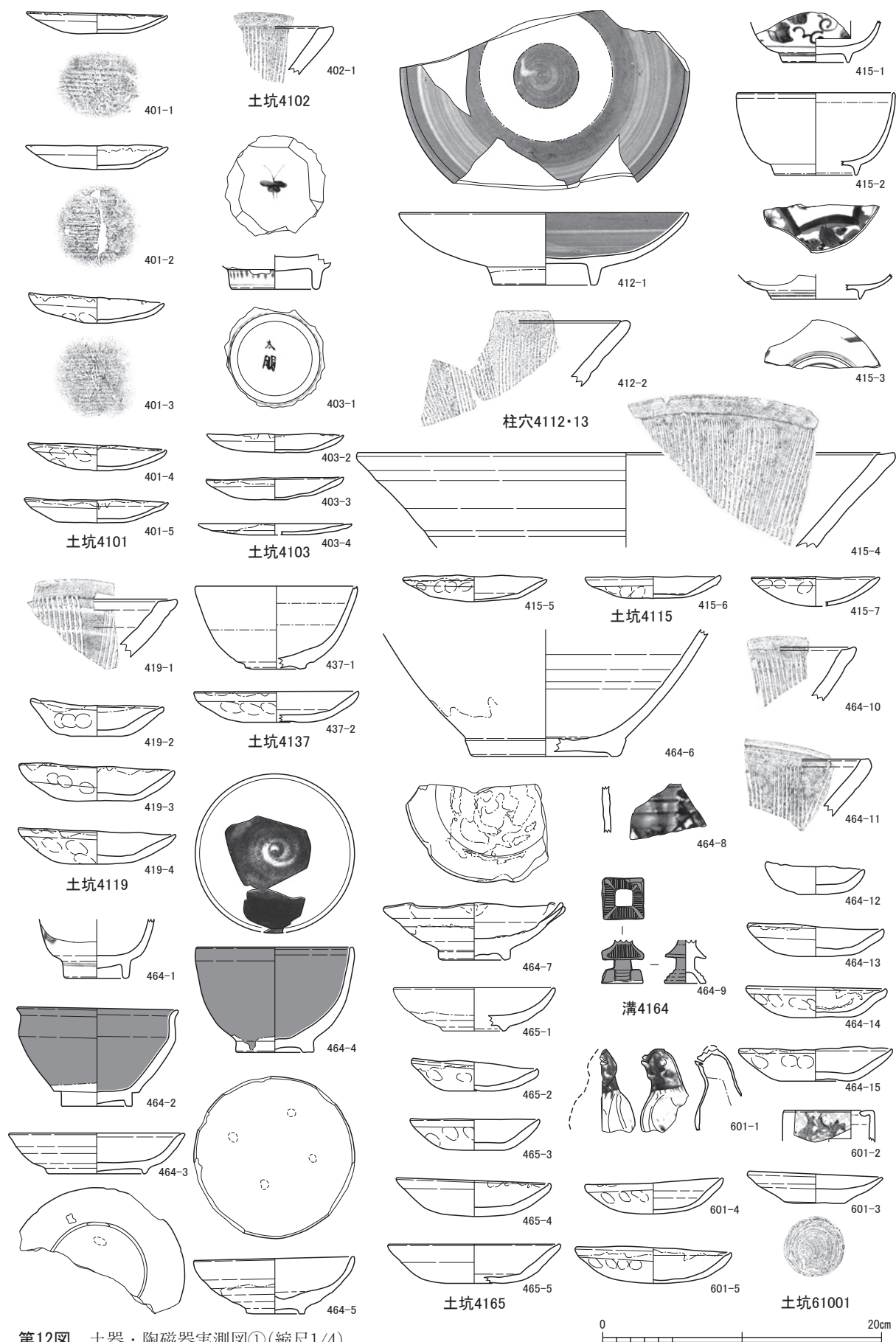
包含層（第13図） 包1～8は肥前系の陶磁器である。1は型成形のレンゲである。染付で家屋を描く。幕末のものと考えられる。2は染付の小坏である。3は染付皿である。蛇の目高台であり、砂が熔着する。4は染付香炉である。高台は高く削り出す。5・6は段重である。蓋と身ともに口縁部のみ無釉で、口紅を施す。器壁は均一に薄く、丁寧な作りである。7は唐津の筒碗である。高台は無釉で、鉄絵を施す。8は緑釉の蓋である。底部は回転糸切痕である。9は焼塩壺の蓋である。10は素焼の蓋である。型成形され、刺突文を付ける。素焼状で軟質である。11は越前焼の鉢である。ロクロ成形で、脚部を貼り付ける。赤土を塗布し底部中央に穿孔がある。底部には砂の熔着が見られる。18世紀後半に分類される。

第2節 瓦（図版第10、第14図、第4表）

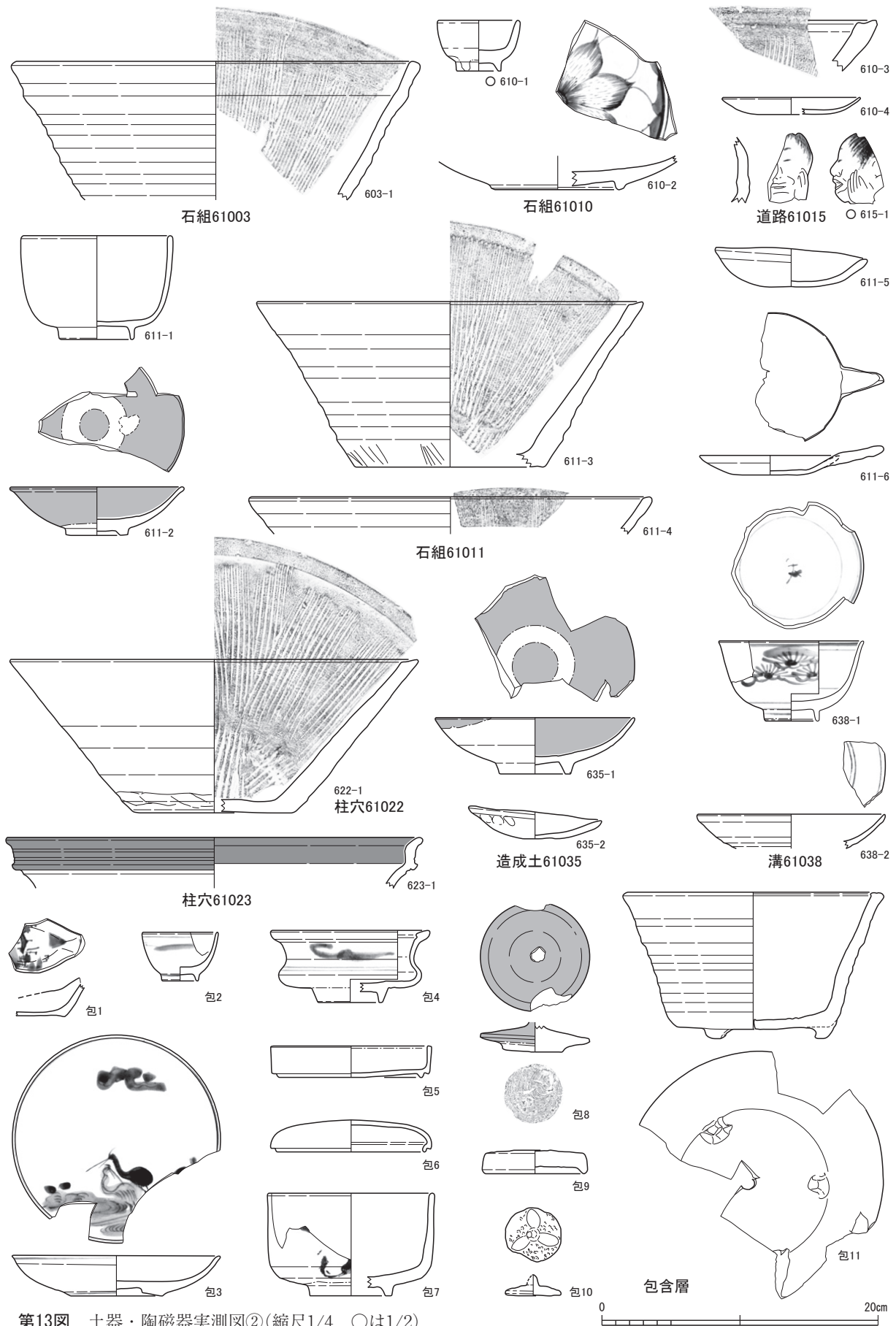
出土瓦には、大別して銀色に発色するいぶし瓦と赤土を塗る赤瓦がある。玉縁の丸瓦、軒平瓦、面戸瓦、伏間瓦の7点を図化した（第14図、第4表）。464-16は半分以上欠損しているが、素焼状の鰹面戸瓦である。裏面に窯印を持つ。601- 6はいぶしの丸瓦である。タタラ成形で、凹面に布目があり、凸面に格子状のタタキの痕跡が確認できる。最後にヘラ状工具で縦方向に平行になでる。610- 5・6・7は赤土を塗る丸瓦である。玉縁を除く凸面にのみ施釉される。タタラ成形で、凹面に布目があり、凸面を平行になでる点はいぶし瓦と共通している。3点とも同じ技法で作られているが、5は良く焼締まり、赤く発色する。6の焼成は甘く、赤土は濁った茶色に発色している。7は両面に自然釉が掛かり、堅く焼締まるが、赤土は茶色に発色する。これらを時期差か、窯内の焼成温度の差と捉えるかは今後検討が必要である。611- 7はいぶしの軒平瓦である。タタラ成形で、瓦当面を型押し成形し、平瓦部に接合している。その際、アゴの部分に粘土を補強し、丁寧になでている。瓦当文様は草花文で、これまで福井城で報告されていた半葉文の軒平瓦とは異なる文様である。8はいぶしの伏間瓦である。タタラ成形で、棧と平瓦部が接する面に櫛目を入れ、丁寧になでて接合している。また、中央部に8mm程度の穿孔が2箇所確認できる。

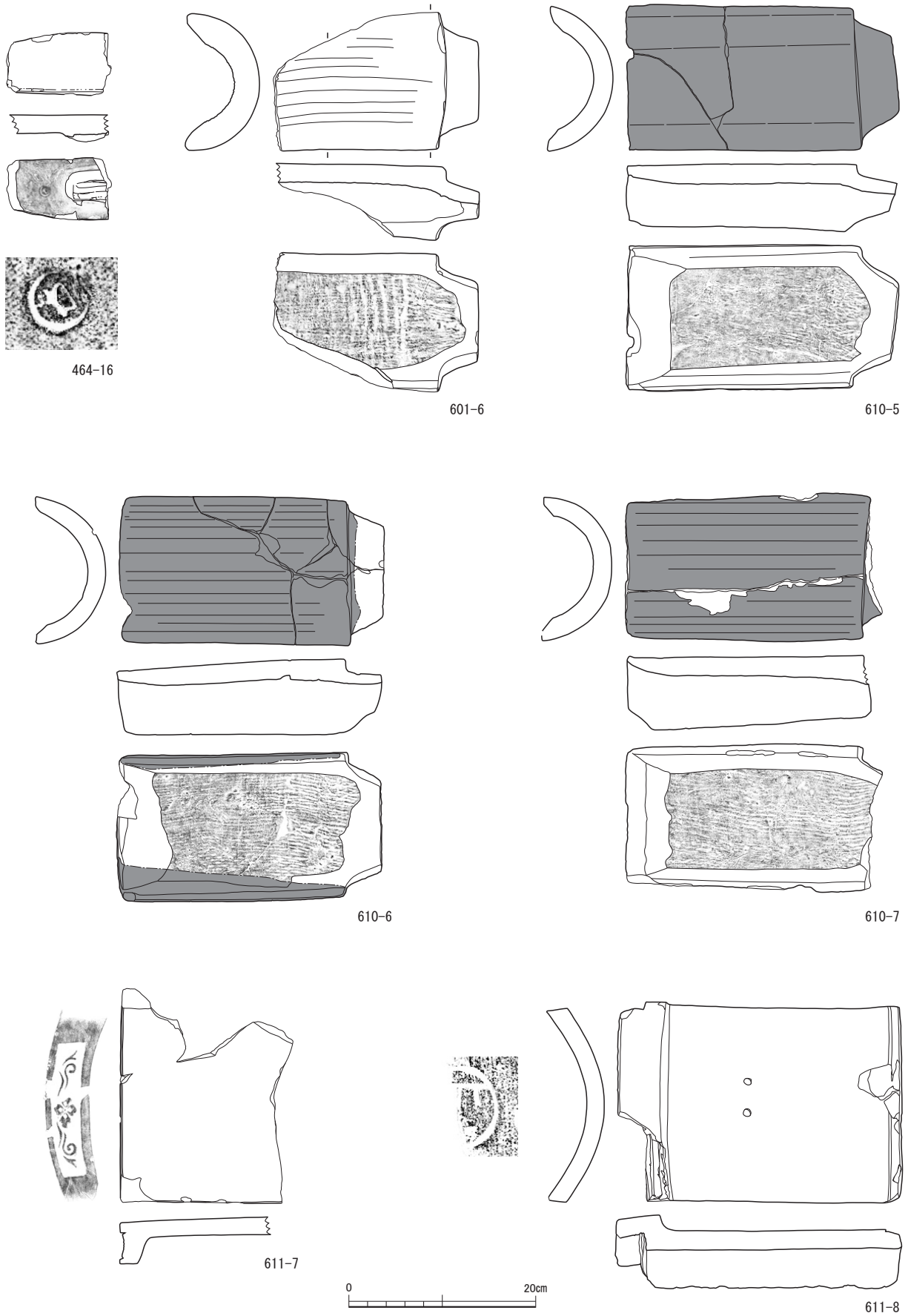
註

- 1 中原義史 岩田隆 編2011『福井城跡－JR北陸線外2線連続立体交差事業（高架側道5号線）に伴う調査－』福井県埋蔵文化財調査報告第118集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター I・K系は本稿にて追加。
- 2 木村孝一郎2011「越前焼の編年の研究と生産地の動向」『山陰地方における越前・常滑系陶器』山陰中世土器検討会
- 3 大橋康二2001『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
- 4 愛知県史編纂委員会2008『愛知県史』別冊窯業2 中世・近世瀬戸系



第12図 土器・陶磁器実測図①(縮尺1/4)





第14図 瓦実測図(縮尺1/6 464-16・611-8の窯印拓影は1/1)

第4表 土器・陶磁器・瓦観察表

挿図 番号	遺物番号	出土地点		遺構番号	器種	産地	法量(cm)			釉薬・装飾	成形・調整・その他
		調査区	グリッド				口径	底径	高さ		
12	401-1	04-1	F-10	4101	土師質皿	――	10.1	――	1.55	――	見込ナデ ロ縁部やや厚くつまむ 板状圧痕 灯芯油痕あり 色調…灰白色 C
12	401-2	04-1	F-10	4101	土師質皿	――	10.15	――	1.7	――	見込ナデ ロ縁部やや厚くつまむ 板状圧痕 灯芯油痕あり 色調…明橙 C
12	401-3	04-1	F-10	4101	土師質皿	――	9.7	――	2.15	――	見込ナデ ロ縁部やや厚くつまむ 板状圧痕 灯芯油痕あり 色調…明橙 C
12	401-4	04-1	F-10	4101	土師質皿	――	10.0	――	2.0	――	見込ナデ ロ縁部やや厚くつまむ 灯芯油痕あり 色調…明橙 C
12	401-5	04-1	F-10	4101	土師質皿	――	10.3	――	1.8	――	見込ナデ 外面段が付く程強く横ナデ 板状圧痕 灯芯油痕あり 色調…明橙 K
12	402-1	04-1	F-10	4102	播鉢	越前	――	――	(3.4)	――	描目 ナデ
12	403-1	04-1	F-10	4103	碗	伊万里	――	6.35	(2.5)	透明釉	削出高台 染付 曇付に砂焼着 裏銘「大明」 見込蝶文
12	403-2	04-1	F-10	4103	土師質皿	――	9.8	――	1.35	――	見込ナデ ロ縁部外方に引く 器壁薄い 板状圧痕 灯芯油痕あり 色調…明橙 D
12	403-3	04-1	F-10	4103	土師質皿	――	9.8	――	1.6	――	見込ナデ ロ縁部外方に引く 器壁均一に薄い 灯芯油痕あり 色調…明橙 D
12	403-4	04-1	F-10	4103	土師質皿	――	(11.0)	――	0.8	――	ロ縁部ややつまむがコースター状に開く 灯芯油痕あり 色調…明橙 I
12	412-1	04-1	F-1	4112・13	皿	唐津	20.7	7.5	5.2	灰釉	削出高台 白化粧土 横刷毛目 見込蛇の目釉剥ぎ
12	412-2	04-1	F-1	4112・13	播鉢	越前	――	――	(5.1)	――	描目12条
12	415-1	04-1	F-1	4115	碗	伊万里	――	4.8	3.0	透明釉	削出高台 染付 曇付に砂焼着
12	415-2	04-1	F-1	4115	蓋付皿	伊万里	11.4	6.0	5.9	透明釉	削出高台 上絵付(刺繍している)
12	415-3	04-1	F-1	4115	皿	伊万里	――	(6.3)	1.8	透明釉	削出高台 染付
12	415-4	04-1	F-1	4115	播鉢	越前	(38.6)	――	6.7	――	描目7条/2.5cm ナデ
12	415-5	04-1	F-1	4115	土師質皿	――	10.3	――	1.7	――	見込ナデなし 見込に圈線あり 灯芯油痕あり 色調…明橙 E
12	415-6	04-1	F-1	4115	土師質皿	――	(9.7)	――	1.6	――	見込ナデ 外面段が付く程強く横ナデ 灯芯油痕あり 色調…明橙 K
12	415-7	04-1	F-1	4115	土師質皿	――	9.2	――	(2.0)	――	見込ナデ ロ縁部やや厚くつまむ 灯芯油痕あり 色調…明橙 C
12	419-1	04-1	F-1	4119	播鉢	越前	――	――	4.2	――	描目9条/3cm ナデ ケズリ
12	419-2	04-1	F-1	4119	土師質皿	――	9.5	――	2.7	――	見込ナデ ロ縁部やや厚くつまむ 灯芯油痕あり 色調…明橙 C
12	419-3	04-1	F-1	4119	土師質皿	――	11.5	――	2.7	――	見込ナデなし 見込に圈線あり灯芯油痕あり 色調…明橙 E
12	419-4	04-1	F-1	4119	土師質皿	――	11.3	――	2.6	――	見込ナデ ロ縁部やや厚くつまむ 灯芯油痕あり 色調…明橙 C
12	437-1	04-1	F-1	4137	碗	唐津	11.6	4.4	5.9	灰釉	削出高台 腰から高台無釉
12	437-2	04-1	F-1	4137	土師質皿	――	11.8	――	2.2	――	見込ナデなし 見込に圈線あり 灯芯油痕あり 色調…明橙 E
12	464-1	04-1	F-2	4164	碗	伊万里	――	4.6	(4.2)	透明釉	削出高台 染付 高台曇付砂焼着
12	464-2	04-1	F-2	4164	天目碗	瀬戸	11.6	5.0	7.1	鉄釉	削出高台
12	464-3	04-1	F-2	4164	丸皿	美濃	12.6	7.0	2.9	長石釉	削出高台 ビン跡(残1) 大窯
12	464-4	04-1	F-2	4164	碗	唐津	11.2	5.4	7.5	緑釉・灰釉	朝鮮唐津 削出高台 兜巾 釉薬掛け分け
12	464-5	04-1	F-2	4164	皿	唐津	11.5	4.1	4.1	灰釉	削出高台 胎土目(残4)
12	464-6	04-1	F-2	4164	鉢	瀬戸・美濃	――	10.8	9.1	灰釉	削出高台
12	464-7	04-1	F-2	4164	皿	唐津	13.0	5.1	4.1	灰釉	削出高台 輪花状口縁 砂目痕(見込残2, 曇付残1)
12	464-8	04-1	F-2	4164	向付(織部)	美濃	――	――	3.35	灰釉・長石釉	白化粧土 鉄絵 沈線
12	464-9	04-1	F-2	4164	玩具	瀬戸・美濃?	――	2.9	(3.1)	鉄釉	五重塔箱型 彫成形 裏面無釉
12	464-10	04-1	F-2	4164	播鉢	越前	――	――	4.0	――	描目 ナデ 自然釉
12	464-11	04-1	F-2	4164	播鉢	越前	――	――	4.4	――	描目9条/2.4cm 素焼き状
12	464-12	04-1	F-2	4164	土師質皿	――	7.1	――	2.35	――	ロ縁部は垂直に立ち上がる 外面に手押しの痕跡 ややマメツ 色調…明橙 A
12	464-13	04-1	F-2	4164	土師質皿	――	9.4	――	2.4	――	見込ナデ ロ縁部やや厚くつまむ 灯芯油痕あり 色調…灰白 C
12	464-14	04-1	F-2	4164	土師質皿	――	10.1	――	2.3	――	見込ナデ ロ縁部やや厚くつまむ 灯芯油痕あり 色調…明橙 C
12	464-15	04-1	F-2	4164	土師質皿	――	11.0	――	2.3	――	見込ナデ ロ縁部やや厚くつまむ 灯芯油痕あり 色調…明橙 C
14	464-16	04-1	F-2	4164	甕面戸瓦	越前	長さ(10.4)	幅(6.5)	――	素焼状	型成形 窯印あり 裏面中央に櫛目あり 欠損激しい
12	465-1	04-1	F-2	4165	皿	唐津	11.6	4.6	3.1	灰釉	削出高台
12	465-2	04-1	F-2	4165	土師質皿	――	9.1	――	2.35	――	見込ナデ ロ縁部やや厚くつまむ 灯芯油痕あり 色調…灰白 C
12	465-3	04-1	F-2	4165	土師質皿	――	9.3	――	2.25	――	見込ナデなし 見込に圈線あり 色調…灰白 E
12	465-4	04-1	F-2	4165	土師質皿	――	11.1	――	2.8	――	見込ナデなし 見込に圈線あり 灯芯油痕あり 色調…灰白 E
12	465-5	04-1	F-2	4165	土師質皿	――	12.4	――	2.8	――	見込ナデなし 見込に圈線あり 色調…明橙 E
12	601-1	06-10	I-5・6	61001	水滴	伊万里	――	――	5.9	透明釉	上絵付(赤・緑) 型押成形
12	601-2	06-10	I-5・6	61001	香炉	伊万里	(6.6)	――	2.2	透明釉	上絵付(赤・黒・黄・緑)
12	601-3	06-10	I-5・6	61001	小皿	唐津	9.7	4.3	2.3	――	糸切り痕 ロクロ成形 ケズリ
12	601-4	06-10	I-5・6	61001	土師質皿	――	9.9	――	2.55	――	見込ナデ ロ縁部やや厚くつまむ 灯芯油痕あり 色調…明橙 C
12	601-5	06-10	I-5・6	61001	土師質皿	――	11.2	――	2.6	――	見込ナデ ロ縁部やや厚くつまむ 灯芯油痕あり 色調…明橙 C
14	601-6	06-10	I-5・6	61001	丸瓦	越前	長さ(22.0)	幅14.8	8.1	いぶし	タタラ成形 凹面布目 ケズリ 凸面格子状のタタキ目 ヘラ状工具によるタテナデ
13	603-1	06-10	G-8	61003	播鉢	越前	(29.6)	――	10.0	――	ロクロ成形 描目10条
13	610-1	06-10	I-5	61010	玩具	伊万里	3.0	1.6	1.8	透明釉	白磁碗 削出高台
13	610-2	06-10	I-5	61010	中皿	伊万里	――	9.0	(2.0)	透明釉	削出高台 染付に曇付砂焼着
13	610-3	06-10	I-5	61010	播鉢	越前	――	――	(3.8)	赤土	描目8条 赤土厚く塗る 自然釉
13	610-4	06-10	I-5	61010	陶質小皿	――	(10.0)	――	1.2	――	焼き締め ケズリ 灯芯油痕あり
14	610-5	06-10	I-5	61010	丸瓦	越前	長さ(28.9)	幅15.5	7.2	赤土	タタラ成形 凹面布目 ケズリ 凸面玉縁以外に赤土 ヘラ状工具によるタテナデ
14	610-6	06-10	I-5	61010	丸瓦	越前	長さ(28.0)	幅15.7	7.6	赤土	タタラ成形 凹面布目 ケズリ 凸面玉縁以外に赤土 タテナデ 釉の発色は暗灰色
14	610-7	06-10	I-5	61010	丸瓦	越前	長さ(26.0)	幅15.3	7.8	赤土	タタラ成形 凹面布目 ケズリ 凸面玉縁以外に赤土 タテナデ 自然釉 堅く焼結る
13	611-1	06-10	I-6・7	61011	碗	唐津	11	5.2	7.5	灰釉	削出高台
13	611-2	06-10	I-6・7	61011	皿	唐津	12.6	4.5	3.5	緑釉	削出高台 砂目痕 見込蛇の目釉剥ぎ
13	611-3	06-10	I-6・7	61011	播鉢	越前	(28.0)	(13.9)	11.95	――	描目7条 ナデ 自然釉
13	611-4	06-10	I-5・6, H-7	61011	播鉢	越前	(29.2)	――	2.5	――	描目11条 自然釉
13	611-5	06-10	I6・7	61011	土師質皿	――	11.0	――	2.85	――	見込ナデ ロ縁部やや厚くつまむ 灯芯油痕あり 色調…明橙 C
13	611-6	06-10	I6・7	61011	土師質皿	――	13.3	2.2	10.1	――	見込ナデなし 見込に圈線あり 把手貼付 灯芯油痕あり 色調…明橙 E
14	611-7	06-10	I6・7	61011	軒丸瓦	越前	長さ(18.0)	幅(22.5)	1.9	いぶし	タタラ成形 瓦当面(草花文)型押し成形 アゴ部粘土補強のちナデ
14	611-8	06-10	I-5	61011	伏間瓦	越前	長さ30.3	幅21.3	7.6	いぶし	タタラ成形 穿孔2点あり(径8mm) 窯印あり 棧と平瓦部の接合部に櫛目
13	615-1	06-10	G-8	61015	人形	信楽	幅1.6	――	縦2.5	灰釉	型押し成形 鉄絵
13	622-1	06-10	G-8	61022	播鉢	越前	29.6	11.6	11.05	――	ロクロ成形 削り ナデ 描目7条 自然釉 火ぶくれ
13	623-1	06-10	G-8	61023	播鉢	唐津	(30.2)	――	3.2	鉄釉	ロクロ成形 ナデ 描目あり
13	635-1	06-10	I-5	61035	皿	唐津	14.2	5.2	4.05	緑釉・透明釉	削出高台 見込蛇の目釉ハギ
13	635-2	06-10	I-5	61035	土師質皿	――	9.6	――	2.35	――	見込ナデ ロ縁部外方に引く 器壁薄い 灯芯油痕あり 色調…明橙 D
13	638-1	06-10	H・G-8	61038	碗	伊万里	10.5	3.9	5.81	透明釉	削出高台 染付 貫入
13	638-2	06-10	(G・H・7)	61038	皿	伊万里	(13.6)	――	2.5	透明釉	陶胎染付 薄い唐草文 白化粧土
13	包1	06-10	G-8・9	包含層	レンゲ	伊万里	――	――	2.4	透明釉	型成形 染付
13	包2	06-10	I-5	包含層	小坏	伊万里	(5.5)	2.6	3.5	透明釉	削出高台 染付
13	包3	06-10	H-7	包含層	皿	伊万里	15.0	6.55	2.95	透明釉	削出高台 蛇の目高台砂焼着 染付
13	包4	06-10	I-5	包含層	香炉	伊万里	11.5	4.75	5.2	透明釉	削出高台 染付 高台無釉
13	包5	06-10	G-8・9	包含層	段重	伊万里	11.6	10.4	2.3	透明釉・鉄釉	削出高台 ロ紅 包6とセット
13	包6	06-10	G-8・9	包含層	段重蓋	伊万里	11.6	10.6	2.25	透明釉	ロクロ成形 ケズリ ナデ 包5とセット
13	包7	06-10	I-5	包含層	僧碗	唐津	12.1	5.9	7.4	灰釉	削出高台 鉄絵
13	包8	06-10	I-5	包含層	蓋	唐津	7.9	4.3	(2.2)	灰釉	糸切り痕 ケズリ ナデ
13	包9	06-10	G-9・F10	包含層	蓋(焼塩壺)	――	――	合口径(7.2)	1.7	――	ナデ
13	包10	06-10	H-7	包含層	蓋(素焼き)	――	つまみ径0.9	4.0	1.5	――	型成形 一部刺突文 京都?
13	包11	04-1	F-1・10	包含層	植木鉢	越前	18.8	11.0	10.6	鉄釉	ロクロ成形 ケズリ 板状圧痕 脚部貼付(残2) 底部穿孔・砂焼着 自然釉

第3節 金属製品（図版第12, 第15図, 第5表）

金属製品は、確認したもののうち比較的状态の良好な24点を図示した。内訳は、煙管の雁首2点（1・2）・吸口（3）、釘3点（4～6）、鋳（7）、匙2点（10・11）、簪状製品（12）、鍋蓋（13）、不明品2点（8・9）、銭貨11点（14～24：24は雁首銭）である。以下、種別ごとに説明する。

煙管（1～3） 雁首（1）は大きな補強帯を介して火皿と首部が接続する。火皿孔がある。雁首（2）は脂返しが湾曲せず、火皿と直線的に接続する。吸口（3）は吸口端がやや膨らむ。

釘（4～6） いずれも頭幅の身幅との比率が2.5:1以下であるので頭巻釘（小巻）に分類される。

鋳（7） 丸頭であり、やや半球状に膨らむ。身部も断面形が歪な円形である。

匙（10・11）（10）は柄の端が小さく巻くように折り返されている。（11）は全体に扁平である。

簪状製品（12） 欠損の可能性もあるが脚部が極端に短い。耳搔がなく、鶴亀意匠の装飾が付く。

鍋蓋（13） 鋳出された鍋などの蓋の一部である。摘みなどを欠く。

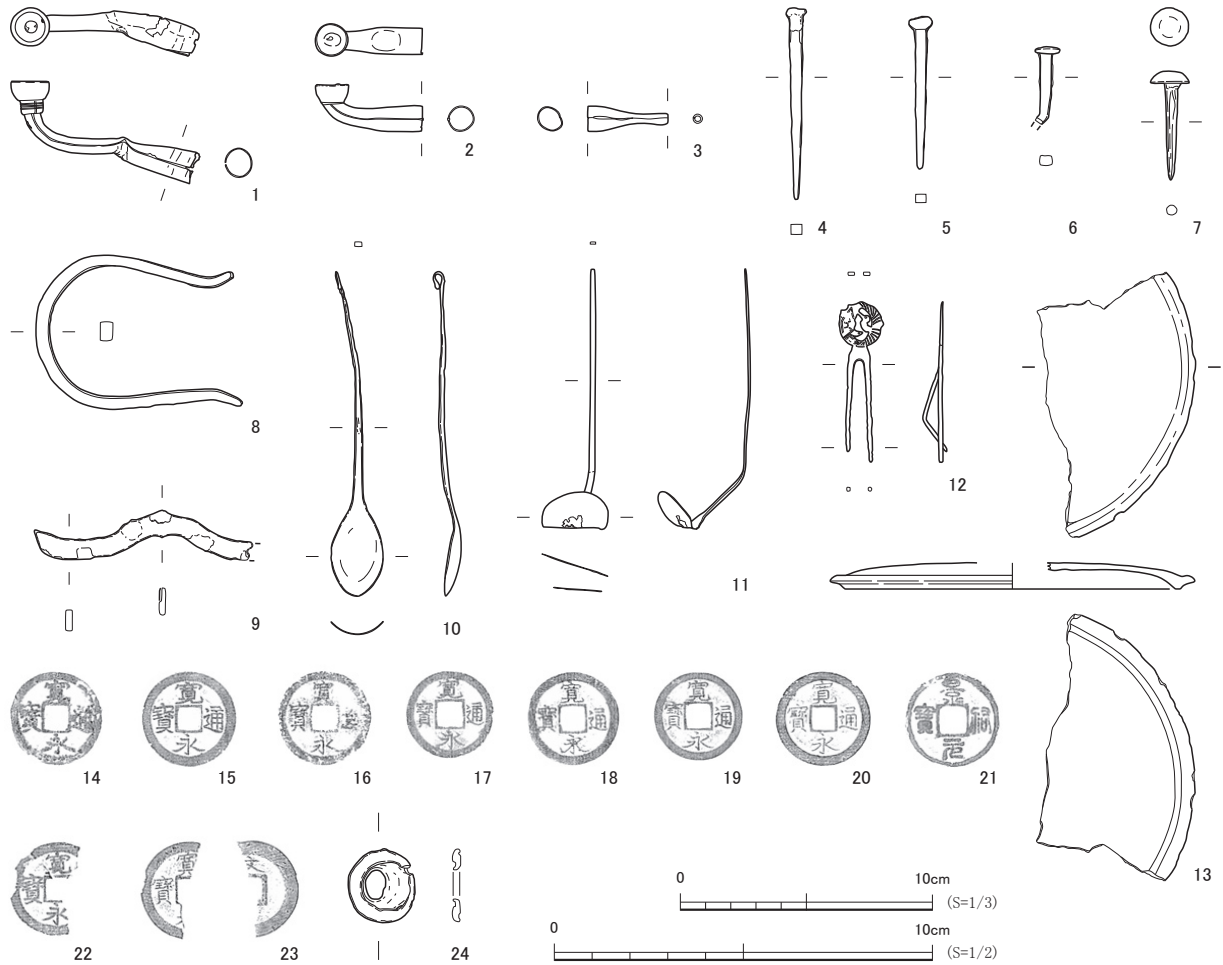
不明製品（8・9）（8）はU字形の製品で、一方の端は尖り気味で、他方は面を持つ。断面は長方形である。（9）は火打金の刃部のような形状のものである。

銭貨（11） 銭貨の内訳は、寛永通寶9枚、景祐元寶1枚と、雁首銭1点であり、いずれも銅製である。寛永通寶の内訳は、古寛永3枚（14・15・22）、文銭1枚（23）、新寛永5枚（16～20）である。

第4節 石製品（図版第11, 第16・17図, 第6表）

石製品は、確認したもののうち比較的状态の良好な40点を図示した。その内訳は、石瓦14点（1～14）、行火4点（15～18）、盤4点（19～22）、鉢（23）、重石（25）、砥石8点（26～33）、硯2点（34・35）、不明品2点（24・36）、碁石（写真図版第11～37～40）である。砥石・碁石以外はいずれも凝灰岩製おそらく笏谷石による製品とみられる。以下、種別ごとに説明する。

石瓦（1～14） 丸瓦6点（1～6）、軒丸瓦3点（7～9）、棟瓦4点（10～13）、鬼瓦（14）を図示した。丸瓦（1～6）は、（2～5）が軒側の先端部分を、（6）が棟側の大半を欠いており、全形を窺えるのは（1）のみである。軒側のみ破片である（6）は、破断面が直線的に整形されているようであり、意図的に切断し道具瓦として使用したことが考えられる。（4）は棟側接続部の突起を欠くが、その上の接続面に「||」の刻印がある。それ以外の接続突起の形状は、（1・2）は突起上面に弱い稜を持つもの、（3）は突起上面の稜が面取りされるもの、（5）は突起上面の稜が弱く曲面状になるものである。また、（4・5）のみ下面に柄穴状の挟り込みが認められる。これは滑落の防止のために、釘などで固定した際のものと考えられ、（4）には1ヶ所、（5）には2ヶ所確認される。軒丸瓦（7～9）は、いずれも軒側のみ破片である。瓦当はいずれも無紋である。（7・8）は瓦当下端の突出した部分を欠いており、落下した際に破損したことがわかる。（9）も同様に下端を欠くが、瓦当部分のみが切断されたものであり、他の部分は丸瓦として再利用されているようである。（9）のように切断された瓦当や、瓦当部分を切断しようとして破損し廃棄されたもの、瓦当切断途中の軒丸瓦は、福井城の調査によく見かけた事例である。棟瓦（10～13）は、いずれも角形であり、上面が平坦となる無稜式であるが、（10・11）が大型品、（12・13）が小型品である。（10）は両端を欠く。（11）は雌側のみ残存するが基部突起を欠き、その上の端面の一部が残存するのみである。（12）は雄側基部の破片である。（13）は雌側基部の破片である。鬼瓦（14）は、無紋で、ハリカワには巻上などの装飾がなく、足元も発達していない。背面に柄穴などがなく、ハリカワ上面に鋸穴があることから、棟へは鋸によって固定したよ



第15図 金属製品実測図(縮尺1/3: 1~13, 1/2: 14~24)

第5表 金属製品観察表

金属製品														
挿図 番号	種別	出土地点		計測値(mm, g)						材質	備考	出土遺構の主な 遺物の時期	遺物番号	R番号
		グリッド	遺構・層位・トレンチ	A 全長	B 全高	C 肩側径	D 火皿径	E 火皿高	重さ					
15-1	煙管(雁首)			7.5	4.1	1.1	1.5	0.7	9.5	銅	補強帯あり、肩なし、 火皿孔あり	19c	M610-3	R610
15-2	煙管(雁首)	I-5	61015(道路)	4.2	1.9	1.0	1.3	0.8	8.5	銅	補強帯なし、肩なし	17c後～19c	M61015-3	R61015-5
15-3	煙管(吸口)	H-7	砂利層(カクラン含む)	長 3.2	胴側径 1.0	吸口径 0.35			1.5	銅	胴なし	～19c	M610K4	R610K-5
15-4	頭巻釘	H-7	砂利層(カクラン含む)	全長 7.6	太 0.4	頭幅(径) 0.8	頭高 0.3		5.0	鉄	小巻	～19c	M610K5	R610K-5
15-5	頭巻釘	H-7	砂利層(カクラン含む)	6.0	0.4	1.0	0.5		3.0	鉄	小巻	～19c	M610K6	R610K-5
15-6	頭巻釘		61011	(3.1)	0.5	1.0	0.3		1.5	鉄	小巻	18c	M61011-2	R61011-3
15-7	紙	I-5・6, H-6		4.3	0.4	1.5	0.5		8.5	銅	丸頭	～19c中	M610H6-4	R610H6
15-8	不明	G-8	61039	横 8.2	縦 6.1	太 0.5			38	鉄	U字形、留金?	19c前	M61039-2	R61039
15-9	不明	H-7	砂利層(カクラン含む)	長 8.7	高 1.9	厚 0.3			9.0	鉄	火打金の刃部?	～19c	M610K7	R610K-5
15-10	匙	H-7		12.9	2.1	0.2			5	銅		17c中～19c後	M610H7-4	R610H7-4
15-11	匙	G-8	61039	(10.3)	2.6	0.1			1.5	銅		19c前	M61039-1	R61039
15-12	簪状製品	H-7	砂利層(カクラン含む)	長 (6.4)	幅 1.8	厚 0.18	脚部長 (4.6)	脚部幅/厚 0.15/0.15	2.5	銅	鶴と亀の意匠	～19c	M610K3	R610K-5
15-13	鍋蓋	H-7	三層目(砂利層)	口径 (14.4)	高 1.0	厚 (1.1)			74	銅	一部残存	(17c後～)19c	M610H7-2	R610H7-1

銭貨												
挿図 番号	銭文	初鑄	出土地点		計測値(mm, g)				備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号	R番号
			グリッド	遺構・層位・トレンチ	径	内区径	孔径	重さ				
15-14	寛永通寶	日本1636年	G-8	集石上面	25	20	6	2.4	古寛永	～19c中	M61003-2	R61003-5
15-15	寛永通寶	日本1636年	H-7	砂利層(カクラン含む)	25	20	5	2.7	古寛永	～19c	M610K2	R610K-5
15-22	寛永?寶	日本1636年	I-5	61010	25	19	6	1.4	古寛永	17c後～18c前	M61010	R61010-1
15-23	寛永?寶	日本1668年	G-9	61030	(25)	(20)	6	1.2	文銭、背文「文」	17c後～18c前	M61030	R61030
15-16	寛永通寶	日本1697年	H-7	三層目(砂利層)	25	20	6	2.3	新寛永	(17c後～)19c	M610H7-1	R610H7-1
15-17	寛永通寶	日本1697年		西側トレンチ	23	19	6	2.6	新寛永	19c後	M610T1	R610T1-1
15-18	寛永通寶	日本1697年			25	20	6	3.1	新寛永	18c後～19c中	M610-1	R610
15-19	寛永通寶	日本1697年			23	19	6	3.3	新寛永	19c	M610-2	R610
15-20	寛永通寶	日本1697年	I-5・6, H-6		25	20	6	3.2	新寛永	～19c中	M610H6-3	R610H6
15-21	景祐元寶	北宋1034年	I-5・6, H-6		25	22	6	3.1		～19c中	M610H6-1	R610H6
15-24	雁首銭		H-7	調査区側溝(トレンチ)	縦1.9 横1.7	縦1.3 横1.2	縦8.0 横5.0	1.8		17c～19c	M610T4	R610T2-2



第16図 石製品実測図①(縮尺1/10)



第17図 石製品実測図②(縮尺1/6 14・19・20・24・25のみ縮尺1/8)

うである。

行火（15～18）（15）は蓋の小破片、（16～18）は身の破片である。いずれも楕円型の製品とみられる。（16）は身の正面側上端の破片で、下に方形孔の痕跡が並ぶ。方形孔を削り抜いた際の圏線が残る。（17）は小さめの円孔・方形孔の痕跡があり、背面側の破片である可能性がある。（18）は正面下半から底部にかけての破片である。

盤（19～22） いずれも大半を欠失するが、平面形は方形である。（19・21）は底面に脚が残る。（21・22）は小型品であり、身の短軸幅より体部立ち上がりの長い、槽形の製品となるものとみられる。

鉢（23） 口縁部破片である。外面には鑿による簾加工が施され、内面は平滑に仕上げられている。

重石（25） 大半を欠失するが、円形に近い形状となるものとみられ、中央に穿孔が施される。

砥石（26～33）（29）は片側を欠失した扁平な製品である。（26～28）は側面が平滑に仕上げられており、他製品からの転用も考えられる。（30・31）には擦切り跡が残る。（32）は小さく歪な5面体であり、4面が使用されている。（33）は長軸の4面が使用されている。いずれも粘板岩製である。

硯（34・35） 両者とも陸の一隅のみの破片である。どちらも粘板岩製である。

基石（図版第11-37～40）（37～39）は歪な楕円形である。（40）はほぼ正円形であるが、一部欠損する。（37）は黒く、（38）は白く、（39・40）は光沢のない灰色である。本来、白石はハマグリの貝殻から成形されるものであるため、（38～40）はその代用品であろう。

不明製品（24・36）（24）は、掴み手が付く方形盤の口縁部付近の破片である可能性がある。（36）は6面が整形され、側面の角に面取りのある製品である。整形時の擦痕などが残るが、砥石のように使用した痕跡はない。笏谷石製である。

第6図 石製品観察表

挿図・ 図版番号	種別	出土地点		計測値(cm)					備考	出土遺構の主な 遺物の時期	遺物番号	R番号
		グリッド	遺構・層位・トレンチ	長	幅	高	基部長	接続面高				
16-1	丸瓦	I-5	61010	32.8	14.7	11.05	3.2	4.1	基部、先端部欠損	17c後～18c前	610S4	R61010-1
16-2	丸瓦	I-5	61010	(13.8)	14.7	10	3.1	3.7	基部のみ	17c後～18c前	610S6	R61010-1
16-3	丸瓦	I-5	61010	(17.3)	15.5	11.3	3.5	5.1	基部のみ	17c後～18c前	610S11	R61010-1
16-4	丸瓦	I-5	61010	(20.2)	13.9	10.85	—	3.6	基部のみ、基部欠損、刻印あり、ほぞ穴あり	17c後～18c前	610S10	R61010-1
16-5	丸瓦	I-5	61010	(27.0)	13.7	11.6	—	—	基部、下面にほぞ穴あり	17c後～18c前	610S5	R61010-1
16-6	丸瓦	H-6,I-6	61012	(17.5)	14.3	8.2	—	—	先端部のみ、向かって右側面に稜あり	17c中～19c	610S1	R61012-5
16-7	軒丸瓦	H-6,I-6	61012	(15.7)	15.5	(11.6)	—	—	瓦当付近、瓦当欠損	17c中～19c	610S14	R61012-5
				瓦当	(14.0)	(8.0)						
16-8	軒丸瓦	I-5	61010	(23.8)	14.2	11.3	—	—	瓦当付近、瓦当欠損	17c後～18c前	610S8	R61010-1
				瓦当	14.3	(10.0)						
16-9	軒丸瓦	I-5	61010	瓦当	11.2	(8.6)			瓦当のみ	17c後～18c前	610S7	R61010-1
				長	幅	高	基部長	接続面高				
16-10	棟瓦	I-5	61010	(40.7)	17.7	12.8	—	—	両端欠失、無稜型	17c後～18c前	610S9	R61010-1
16-11	棟瓦	H-6,I-6	61012	(34.5)	17.2	12	—	上(6.5)	両端欠失、片側一部面残存、無稜型	17c中～19c	610S13	R61012-5
16-12	棟瓦	H-7	3層目砂利層	(19.8)	13	8.3	3.2	下3.7	無稜型	(17c後～)19c	610S59	R610H7-1
16-13	棟瓦	G-8	61003	(24.3)	13.4	8.8	2.6	上3.0	片側基部のみ、無稜型	17c後	610S15	R61003-2
				高	幅	奥行						
17-14	鬼瓦	G-8	61033	20.9	25	14.0			頂部にほぞ穴あり	17c初～前	610S16	R61033
				幅	奥行	高						
17-15	行火	H-6,I-6	61012	(6.2)	(6.6)	(4.0)			蓋、楕円型？内面ス・タール付着	17c中～19c	610S28	R61012-6
17-16	行火	H-6,I-5・6	—	(12.5)	—	(3.9)			楕円形、体部正面窓の上	～19c中	610S30	R610H6
17-17	行火	H-6,I-6	61012	(7.2)	—	(4.15)			体部、口縁部片、円形孔、方形孔あり	17c中～19c	610S32	R61012-4
17-18	行火	H-7	砂利層(カクラン含む)	(22.9)	(8.6)	(8.8)			体部正面、窓の下部分、楕円型	～19c	610S26	R610K-5
				横(復元径)	奥行	高						
17-19	盤	H-6,I-6	61012	(28.8)	35.3	13.1			方形、脚付	17c中～19c	610S12	R61012-5
17-20	盤	G-8	61003	(21.5)	(4.1)	12.7			体部片、方形	19c中	610S19	R61003-4
17-21	盤	G-8	61003、石組掘方掘削中	(7.5)	(6.8)	(3.2)			方形、脚付、底部片	17c初～前	610S34	R61003-3
17-22	盤	G-8	61003、集石上面	(8.5)	(4.0)	6.1			体部片、方形	～19c中	610S20	R61003-5
17-23	鉢	G-8	61039	(23.5)	—	(7.9)			口縁部、2点同一個体、外面簾加工	19c前	610S23	R61039
				縦・長・高	横・幅	奥行・厚						
17-25	重石	H-6,I-6	61012	17.1	(8.8)	5.9			円形、丁寧な整形、1/2残存、中央に円孔あり	17c中～19c	610S3	R61012-5
17-26	砥石	H-6,I-5・6	—	(10.7)	(4.2)	(1.25)			31(S57)と同一個体？ 2片接合 硯転用？	～19c中	610S52	R610H6
17-27	砥石	G-8(G-7)	トレンチ	(9.3)	4.8	2.2			18c～	610S47	R610T2-1	
17-28	砥石	H-7	3層目砂利層	(7.3)	(3.7)	(0.7)			3片接合 硯転用？	(17c後～)19c	610S40	R610H7-1
17-29	砥石	G-8,H-7	3層集石周辺	(9.8)	4.1	1.95			19c中～	610S18	R610G8-12	
17-30	砥石	I-5	—	(3.6)	5.1	0.8			17c～19c中	610S46	R610S5-5	
17-31	砥石	—	西側トレンチ	(3.4)	(1.3)	(0.65)			36(S52)と同一個体？ 硯転用？	19c後	610S57	R610T1-1
17-32	砥石	G-8・9	3層上面(砂利層)	5.4	2.5	1.4			～19c中	610S48	R610G8-14	
17-33	砥石	G-9	61015東側の落ち込み下層	9.4	3.2	3.3			(8c)・17c後	610S49	R610G9-11	
17-34	硯	—	61001	(8.0)	(3.5)	0.8			17c後	610S35	R61001	
17-35	硯	H-6,I-6	61012	(5.9)	(4.5)	0.8			17c中～19c	610S29	R61012-4	
17-36	不明	—	西側トレンチ	9.0	8.8	7.9			全面に加工痕残る。砥石としての利用はない。	19c後	610S54	R610T1-1
17-24	不明	G-8	61033	(11.3)	(23.0)	9.7			盤などの口縁？把手	17c初～前	610S17	R61033
				長径	短径	厚						
図版11-37	基石	F-10,G-9	3層	1.9	1.5	0.45			黒	17c後～19c中	610S36	R610F10-2
図版11-38	基石	H-7	3層目砂利層	2.5	2	0.9			白	(17c後～)19c	610S45	R610H7-1
図版11-39	基石	I-5	—	2.2	2	0.9			白？ 光沢なし	17c～19c中	610S38	R610S5-5
図版11-40	基石	F-10,G-9	3層	(1.8)	2.3	0.9			白？ 光沢なし、一部欠損	17c後～19c中	610S37	R610F10-2

第5節 古代の遺物（図版第12、第18図、第7表）

古代の遺物として細片を除いた土器計45点（土坑4163：22点、包含層：23点）を報告する。

1 土坑4163出土土器の概要

須恵器（第18図1～9） 須恵器は食膳具のみであり、有返蓋・有返坏・無台坏がある。無台坏の口径は10cm前後でまとまる。

土師器（第18図10～22） 土師器は食膳具と煮炊具がある。食膳具は無台坏、煮炊具は甕がある。無台坏には、赤彩暗文を施された個体（11～13）がある。甕は口径20cm以上と、口径10cm台の大小規格がある。段々口縁の個体（14・15・18・20）がある。

土坑4163出土土器は一括性が高く、T K217新段階の7世紀中葉頃にまとまる。赤彩暗文土師器や段々口縁甕といった外来系の様相が強い土器も存在する。

2 包含層出土土器の概要

須恵器（第18図23～37） 須恵器は食膳具と貯蔵具がある。食膳具は無鈕蓋・有返蓋・有鈕蓋・有返坏・無台坏・高坏がある。貯蔵具は長頸瓶もしくは水瓶と考えられるものと甕がある。

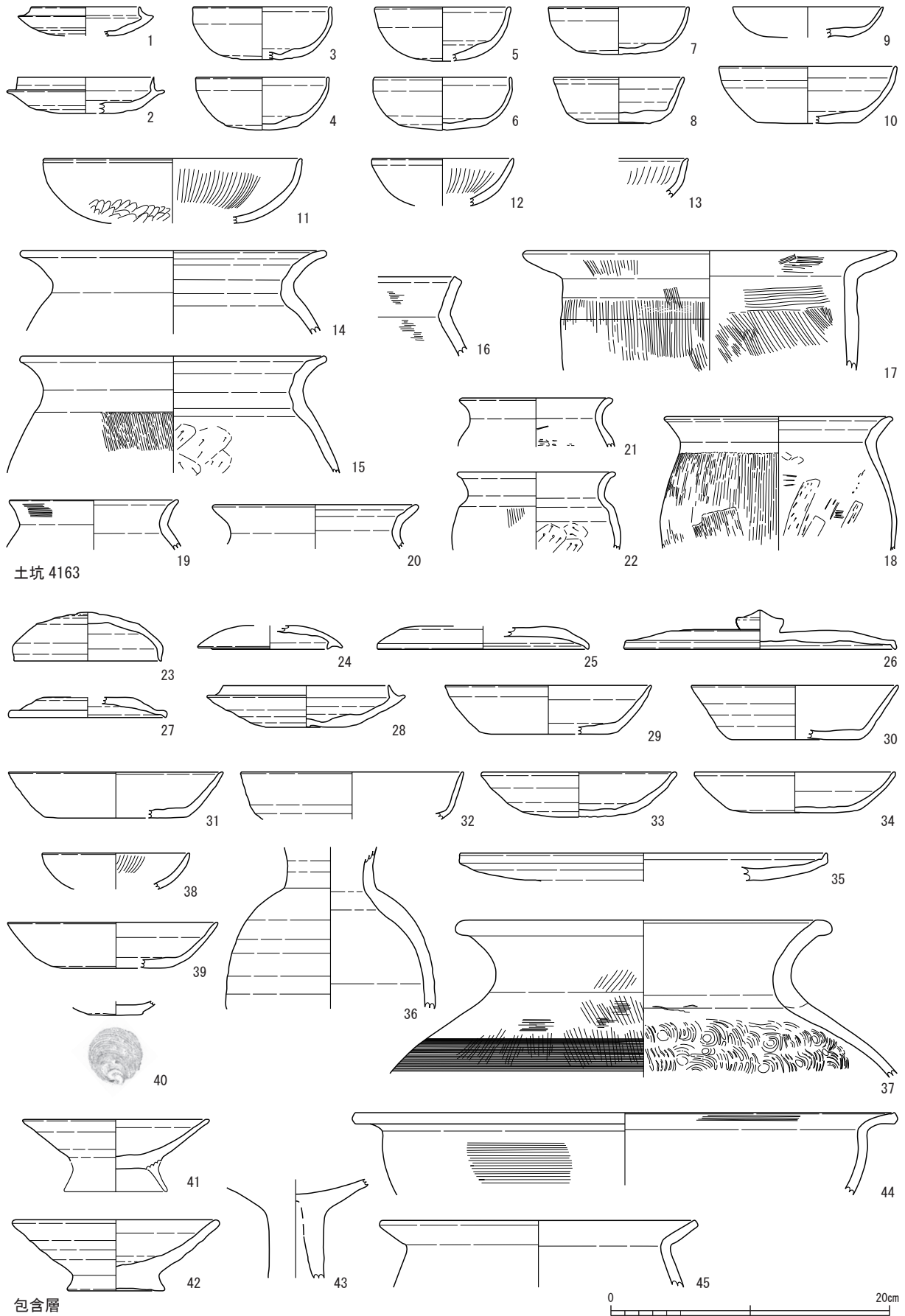
土師器（第18図38～45） 土師器は食膳具と煮炊具がある。食膳具は無台坏・有台坏・高坏がある。煮炊具は鍋と甕がある。

包含層出土土器は、T K209段階の7世紀初頭頃から11世紀後半頃までの時期のものが存在する。

第7図 須恵器・土師器観察表

挿図番号	出土地点	器種	口径(cm)	器高(cm)	調整	焼成	胎土	色調	備考
18-1	土坑4163	須 坏蓋	7.8	—	外)回転ナデ・ヘラ切り後ケズリ 内)回転ナデ	良	粗	灰	
18-2	土坑4163	須 坏	10.0	2.6	外)回転ナデ・ヘラ切り後未調整 内)回転ナデ	良	密	灰	
18-3	土坑4163	須 無台坏	10.4	4.0	外)回転ナデ・ヘラ切り後未調整 内)回転ナデ	良	密	灰	
18-4	土坑4163	須 無台坏	9.6	3.8	外)回転ナデ・ヘラ切り後未調整 内)回転ナデ	良	密	暗灰	
18-5	土坑4163	須 無台坏	9.8	3.9	外)回転ナデ・ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ	良	密	暗灰	
18-6	土坑4163	須 無台坏	10.0	3.8	外)回転ナデ・ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ	良	密	暗灰	
18-7	土坑4163	須 無台坏	10.0	3.4	外)回転ナデ・ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ	良	密	淡灰	
18-8	土坑4163	須 無台坏	9.4	3.3	外)回転ナデ・ヘラ切り後未調整 内)回転ナデ	良	粗	灰	
18-9	土坑4163	須 高坏？	(10.8)	—	外)回転ナデ 内)回転ナデ	不	密	灰白	
18-10	土坑4163	土 無台坏	12.8	4.1	外)回転ナデ 内)回転ナデ	良	密	淡褐	
18-11	土坑4163	土 無台坏	18.6	4.6	外)回転ナデ・ヘラ切り後ケズリ 内)回転ナデ・ミガキ	良	密	褐	赤彩・暗文
18-12	土坑4163	土 無台坏	10.2	—	調整不明	良	密	橙	赤彩・暗文
18-13	土坑4163	土 無台坏	—	—	調整不明	良	密	橙	赤彩・暗文
18-14	土坑4163	土 甕	21.0	—	外)回転ナデ 内)回転ナデ	良	粗	淡橙	
18-15	土坑4163	土 甕	22.0	—	外)回転ナデ・ハケ 内)回転ナデ・ケズリ	良	粗	褐	
18-16	土坑4163	土 甕	—	—	外)回転ナデ・ハケ 内)回転ナデ・ハケ	良	密	橙	
18-17	土坑4163	土 甕	26.8	—	外)回転ナデ・ハケ 内)回転ナデ・ハケ	良	粗	淡橙	
18-18	土坑4163	土 甕	16.4	—	外)回転ナデ・ハケ 内)回転ナデ・ケズリ	良	粗	淡橙	
18-19	土坑4163	土 甕	10.2	—	調整不明	良	粗	橙	
18-20	土坑4163	土 甕	14.8	—	外)回転ナデ 内)回転ナデ	良	粗	褐	
18-21	土坑4163	土 甕	11.0	—	外)回転ナデ・ハケ 内)回転ナデ・ケズリ	良	粗	暗褐	
18-22	土坑4163	土 甕	11.4	—	外)回転ナデ 内)回転ナデ・ケズリ	良	密	暗褐	
18-23	F10	須 坏蓋	10.6	3.5	外)回転ナデ・ヘラ切り後未調整 内)回転ナデ	良	密	暗灰	
18-24	F10	須 坏蓋	10.4	—	外)回転ナデ・ヘラ切り後ケズリ 内)回転ナデ	良	密	灰	
18-25	F10	須 坏蓋	15.2	—	外)回転ナデ・ヘラ切り後ケズリ 内)回転ナデ	良	密	灰	
18-26	G9,F10	須 坏蓋	19.6	2.8	外)回転ナデ・ヘラ切り後ケズリ 内)回転ナデ	良	密	暗灰	
18-27	F10	須 坏蓋	11.4	—	外)回転ナデ・ヘラ切り後ケズリ 内)回転ナデ	良	密	暗灰	
18-28	F10	須 坏	12.0	3.0	外)回転ナデ・ヘラ切り後未調整 内)回転ナデ	良	密	灰	
18-29	F1	須 無台坏	14.8	3.5	外)回転ナデ・ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ	良	密	灰	
18-30	G・F9	須 無台坏	14.8	3.9	外)回転ナデ・ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ	良	密	青灰	
18-31	F1	須 無台坏	15.4	3.3	外)回転ナデ・ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ	良	密	灰	
18-32	F10	須 無台坏	16.0	—	外)回転ナデ 内)回転ナデ	良	密	灰	
18-33	F10	須 無台坏	14.0	3.3	外)回転ナデ・ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ	良	粗	灰	
18-34	G9	須 無台坏	14.4	2.9	外)回転ナデ・ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ	良	密	暗灰	
18-35	G・F9	須 高坏	(26.4)	—	外)回転ナデ・ヘラ切り後ケズリ 内)回転ナデ	良	密	灰	
18-36	F1	須 長頸瓶？	—	—	外)回転ナデ・ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ	良	密	灰	
18-37	G9	須 甕	27.0	—	外)回転ナデ・タタキ・カキメ 内)回転ナデ・タタキ	良	密	灰	
18-38	F10	土 無台坏	10.6	—	調整不明	良	密	橙	赤彩・暗文
18-39	F10	土 無台坏	15.4	3.3	調整不明	不	密	白橙	
18-40	G9	土 坏底部	—	—	外)回転ナデ・糸切り 内)回転ナデ	良	粗	黄橙	赤彩 回転糸切り
18-41	G9	土 有台坏	13.4	—	外)回転ナデ・ヘラ切り後ケズリ 内)回転ナデ	良	密	黄橙	
18-42	F2	土 有台坏	14.9	5.1	外)回転ナデ・糸切り 内)回転ナデ	良	密	黄灰	回転糸切り
18-43	F1	土 高坏	—	—	調整不明	不	粗	黄橙	
18-44	F10	土 甕	(39.0)	—	外)回転ナデ・カキメ 内)回転ナデ・カキメ	良	粗	淡橙	
18-45	F1	土 甕	22.8	—	調整不明	良	粗	黄橙	

- a. 出土地点は、遺構には遺構番号を、包含層にはグリッド番号を記した。
b. 器種名は、須恵器→須、土師器→土と記した。
c. 焼成は、「良」が焼き締まりが強く硬質のもの、「不」は焼成不良で軟質のものを示す。
d. 胎土は、「密」が細粒少と砂少のもの、「粗」が細粒多と砂多のものを示す。



第18図 須恵器・土師器実測図(縮尺1/4)

第5章 総括

今回の調査地では、近世3面（①近世Ⅲ・②近世Ⅱ・③近世Ⅰ）・古代2面（④古代Ⅱ・⑤古代Ⅰ）の遺構面を確認した。

古代 古代の遺構面は、それぞれ10基前後の遺構を確認したが、調査可能面積が狭小となったため、個々の遺構の性格を把握するには至らなかった。また、時期確定は困難ではあるが、包含層中に7～10世紀頃の遺物が認められること、出土遺物が7世紀中葉のものや10世紀頃とみられるものに限定される遺構があることなどから、⑤古代Ⅰ＝7世紀中葉以降・④古代Ⅱ＝10世紀頃と捉えることは可能である。

近世 近世の遺構面は、①近世Ⅲ（遺構内出土遺物が主に18世紀後葉以降）と、②近世Ⅱ・③近世Ⅰ（遺構内出土遺物が主に17～18世紀前半代）に分けられた。②近世Ⅱ・③近世Ⅰは、遺物からは時期的に区別できないが、層位的な上下関係となる。ただし、FKJ06-10西地区の遺構は主に石列で、遺物を内包する遺構ではないため、石列の変化と周辺の出土遺物によって①～③の段階に峻別した。そのため、遺構の空閑地を挟むFKJ06-10東西両地区の遺構面は、必ずしも対応はしない。FKJ04-1地区についても、道路61015を挟んで東側の別の屋敷地であり、屋敷地ごとに改修・造成の時期や方法が違うため対応しないようである。以下、東側屋敷地（FKJ04-1地区とFKJ06-10東地区の一部）、西側屋敷地東部（FKJ06-10東地区）、西側屋敷地西部（FKJ06-10西地区）に分けてまとめる。なお、道路61015は、18世紀半ば頃に大規模な路盤改良がなされたようであるが、慶長期から慶応期に至るまで移動はしていない。

東側屋敷地 東側屋敷地は、複数の遺構面があったようであるが、大部分が1面のみの検出である。確認した遺構は、いずれも道路61015にはほぼ直交する方向性で並ぶが、すべての方向性が完全に同一ではない。例えば、G9・10石列はほぼ東西方向に延びるが、F1石列は東側がやや南へ振れる。G9・10石列は、上層に17世紀後葉の遺物が出土した溝61007があるため、17世紀前半代頃のものと思われる。F1石列は、溝61007と直交する方向性であり、18世紀前葉の遺物が出土した土坑4112・3に破壊されているため、17世紀後半代の時期を当て嵌めることができる。若干の相違ではあるが、そこに時期差が示されるようである。ただし、若干の相違のみで基本的な方向性が変化しないのは、屋敷地の西側と南側が道路に面しているため屋敷地の平面形に大きな変化がなかったこと、慶長期から幕末まで継続して山本氏の屋敷地だったことによるのかもしれない（ただし、貞享2年の絵図のみ山元と表記される。第19図）。

これまでに確認された福井城の屋敷境は、塀などの痕跡とみられる柱穴列の検出例も僅かにあるが、ほとんどの場合単なる溝として検出される。しかし、相互に接する武家屋敷地の境に遮蔽的な構造物がなかったとは考え難い。そのため、屋敷境溝が区画そのものではなく、遮蔽構造の基礎や屋敷割の基準として掘られた溝であると考えられている。東側屋敷地の東端は溝4164であり、西端は時期によっては不明確だが溝61006・7が該当すると考えられ、そこに塀などの遮蔽構造が造られていたであろう。

西側屋敷地東部 西側屋敷地東部では3つの遺構面を検出した。遺構は、いずれも道路61015に即した方向性であり、時期を経ても変化しない。③近世Ⅰ・②近世Ⅱには10数基の柱穴があり、数列に分かれて道路方向に直交してほぼ平行に並ぶ。そのほとんどが、土坑底面に板石を据えて礎石としており、一部には柱根を残すものもあるため、掘立柱の構造物が継続して造られたことがわかる。これらの柱穴群は、出土遺物や礎石の高さから、ある程度③近世Ⅰ・②近世Ⅱに振り分けることはできるが、確定的なものではない。また、構成する構造物の性格や規模などの詳細も不明である。

①近世Ⅲでは、18世紀後葉以降に道路の西側に石列で囲んだ建物の基礎が構築され、19世紀中葉以降には水路状石組・礫敷・井戸61039などの水に関わる一連の設備が備えられた。柱穴が確認されなくなったのは、礎石建の構造物へと変化したことによるのかもしれない。なお、道路61015西側に沿う溝を埋めて基礎の石列を設置しているが、この溝が道路に伴う側溝であれば公の施設であり、そのようなことは許されない。そのため、道路の側溝ではなく、屋敷地に伴う堀などの基礎の痕跡であるものとする。

西側屋敷地西部 西側屋敷地西部（FKJ06-10西地区）では、時期を追って変化する石列を検出し、周囲の出土遺物や石列の先後関係から、③近世Ⅰ・②近世Ⅱ・③近世Ⅲに分けた。

③近世Ⅰは、上層の石組の下部構造とみられるものを除くと、扁平な石材が疎らに認められるのみである。しかし、それらは一部に乱れがあるものの道路61015と同じように南北方向に並んでおり、礎石列などになるものと考えられる。③近世Ⅰは、出土遺物から概ね17世紀代の遺構面とみられる。

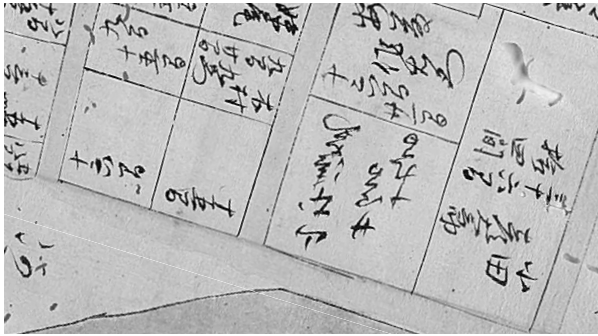
②近世Ⅱ・①近世Ⅲには、おもに建物の基礎を構成するとみられる石列が確認されるが、いずれも南東－北西の方向性であり、前段階の③近世Ⅰから変化する。

①近世Ⅲには、建物の方向性は②近世Ⅱと同じであるが、敷地内を全体に嵩上げて造成し直しており、建物配置などは変化している。また、建物に付属する礫敷があり、その付近に石製方形盤を半ば埋め込んで据えている。この礫敷と据えられた盤は、西側屋敷地東部の上層に認められるような水を扱う設備の一部であることを想起させる。土地条件が同一であるため、井戸を設置するには上総掘りの技術が同様に必要となると考えられるので、この設備の導入は19世紀中葉以降のこととなる。①近世Ⅲ段階には周辺から19世紀代の遺物も出土しており、大きな齟齬はないようである。

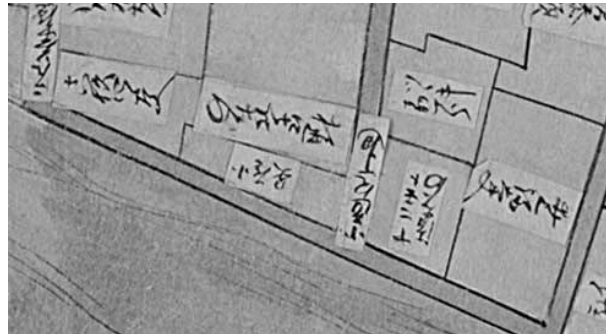
西側屋敷地の構造物の方向性が敷地内の東部と西部で相違するようになる③近世Ⅰから②近世Ⅱへと移る時期は、出土遺物から確定することは困難な状況である。西側屋敷地は、西側の屋敷地の形状に若干の変化があり、幕末には北側の屋敷地との統合・再編が為されるが、それまで屋敷地の形態に大きな変化は認められない（慶長18年頃の絵図については表現方法が異なるため、屋敷地の形態が異なるものか否か明確でない。第19図）。ところが、安永4年（1775）以前の絵図には表記のない南北方向に延びる道路が、享和3年（1803）以降の絵図には屋敷地内に描かれている。絵図によると、この道路は西側屋敷地の中央からやや東側に位置しており、FKJ06-10東・西地区間の遺構空地付近に該当するようである。ただし、道路としての痕跡や砂利敷などは検出されていない。また、この道路は屋敷地の北端までは延びず、屋敷地を二つに分断するものではないが、②近世Ⅱ以降の構造物の方向性の変化はこの道路以西にのみ認められる。そのため、絵図にその道路が描かれるようになるまでの、安永5年から享和2年までの空白の約25年間のうちに為されたこの道路敷設が、②近世Ⅱ以降の方向性の変化の引き金になったと言えそうである。新たな方向性は屋敷地の南に接する道路を基準とするようである。

なお、慶応年間の絵図では、西側屋敷地とその北側の屋敷地が統合して表現されるが、敷地内道路を中心に3人の名が見え、3軒分の屋敷地となるようである。この屋敷地の統合・再編に該当するのが、②近世Ⅱから①近世Ⅲへの変化であり、西側屋敷地の東西がそれぞれ1軒の屋敷地となる。

西側屋敷地は、この界隈の町名（小道具町）の元となる藩の小道具方が居住した組屋敷の区画である。絵図に小道具との記載が認められるのは貞享2年（1685）以降である。寛文9年（1670）の裏書がある絵図では異なる記載がなされ、貞享2年までの15年間は記載が脱落するため、この間に小道具方の組屋敷として整備されたこととなる。敷地内の道路敷設後に再び記載がなくなるが、明治7年（1874）の改正まで町名が存続するため、幕末頃に武家屋敷地に再編されるまでは存続したものと考えられる。



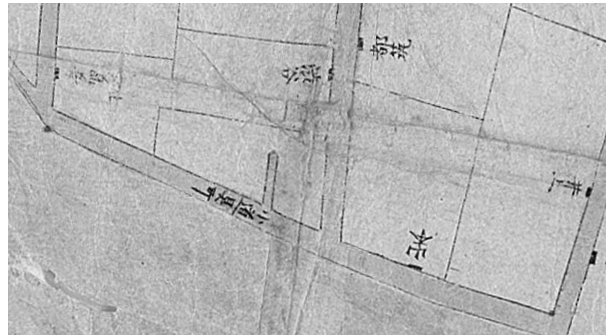
1. 「北之庄城郭図」1309 慶長18年頃（1613年頃）



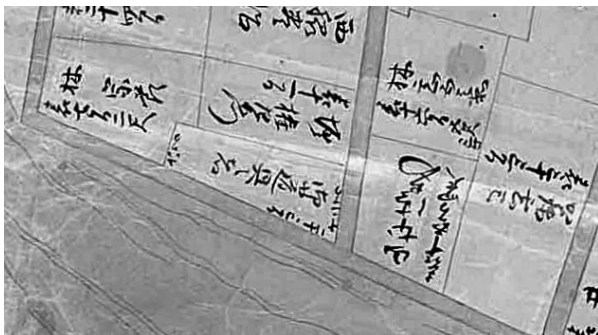
5. 「御城下絵図」1336 安永4年（1775年）



2. 「福居御城下絵図」1320 貞享2年（1685年）



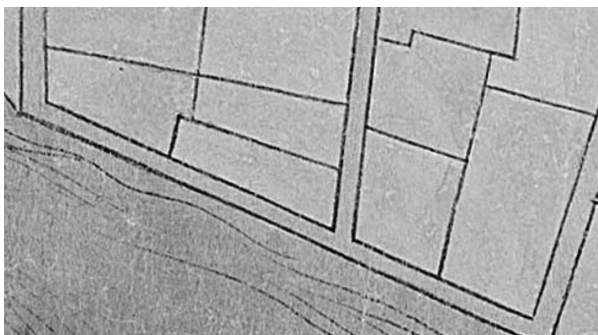
6. 「福井分間之図」1337 享和3年（1803年）



3. 「御城下之図」1325 正徳4年（1714年）



7. 「福井分間之図」1340 文化8年（1811年）



4. 「松平千次郎領知越前国福井城下家中寺社并町絵図」1330 享保10年（1725年）

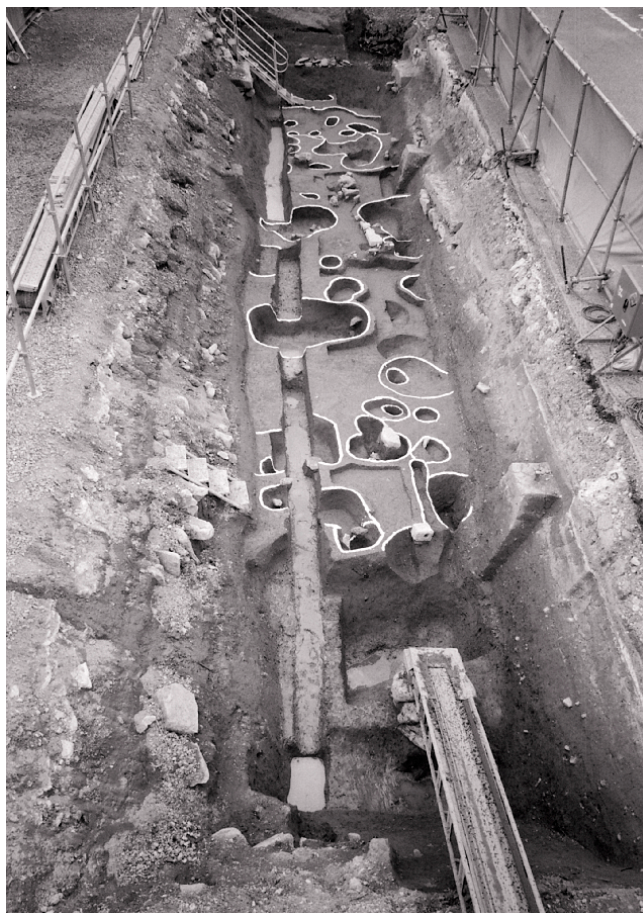


8. 「御城下之図」1342 慶応年間（1865～68年）

※いずれも松平文庫蔵（福井県立図書館保管）の絵図から該当する部分のみ抜き出したものである。

第19図 調査地周辺の変遷

写 真 图 版



(1) FKJ04-1調査区全景 近世Ⅱ(東より)



(2) FKJ04-1調査区全景 近世Ⅱ(西より)



(3) FKJ06-10調査区西側全景 近世Ⅱ(東より)



(4) FKJ06-10調査区東側全景 近世Ⅱ(西より)



(1) F1石列周辺の遺構(南より)



(2) 土坑4119完掘状況(南より)



(3) 土坑4101とその周辺の遺構(南より)



(4) 屋敷境溝4164(南より)



(1) 道路61015砂利敷路面(北より)



(2) 道路61015脇石列(南より)



(3) 道路61015下層 溝検出状況(南より)



(4) 道路61015下層の遺構61030・31・34(西より)



(1) 石組61003(西より)



(2) 石組61003水路部分と礫敷(北より)



(3) 井戸61039半截状況(北より)



(4) 井戸61039底板検出状況(西より)



(1) 柱穴61019(南より)



(2) 柱穴61023下層(北より)



(3) 柱穴61028(北より)



(4) 柱穴61029(西より)



(1) 石組61010(南より)



(2) 石組61010(北より)



(3) 石組61010下層(北より)



(4) 石組61012(北より)



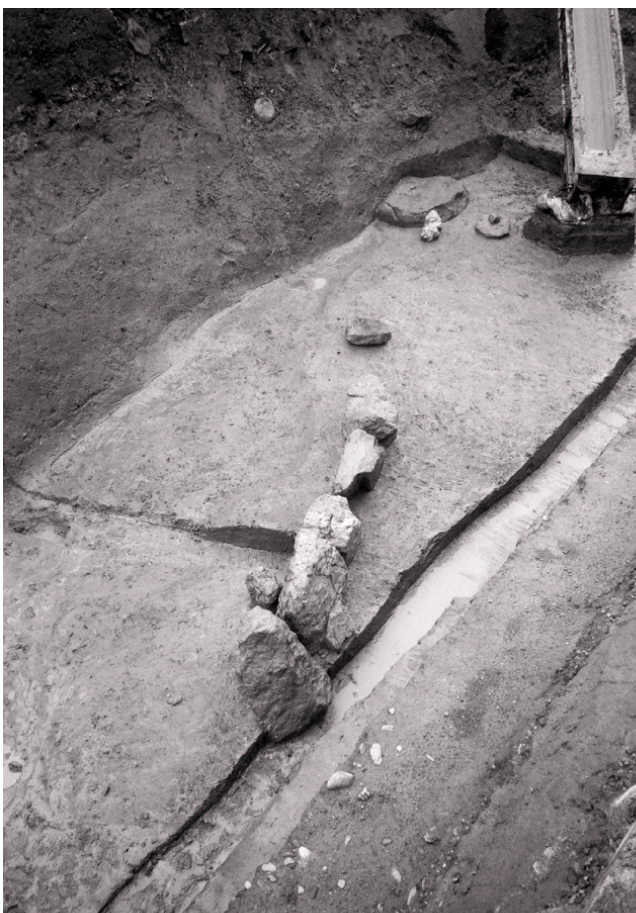
(1) 石組61012(東より)



(2) 石組61012下層(南より)



(3) G9・10石列(西より)



(4) G9・10石列(東より)



(1) FKJ04-1調査区全景 古代Ⅱ(西より)



(2) FKJ04-1調査区全景 古代Ⅰ(東より)



(3) FKJ04-1調査区全景 古代Ⅰ(西より)



(4) FKJ06-10調査区全景 下層確認状況(東より)



401-2



403-1



403-3



401-3



403-2



403-4



412-1



415-1



419-2



419-3



415-3



415-5



415-6



464-1



464-2



464-4



464-9



464-5



464-12



465-1



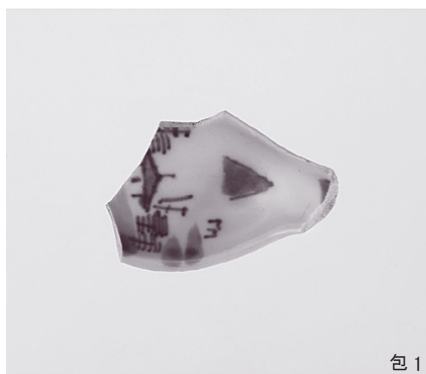
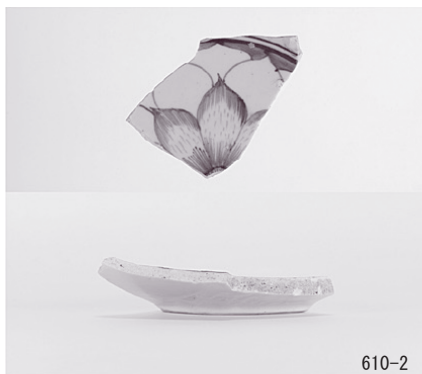
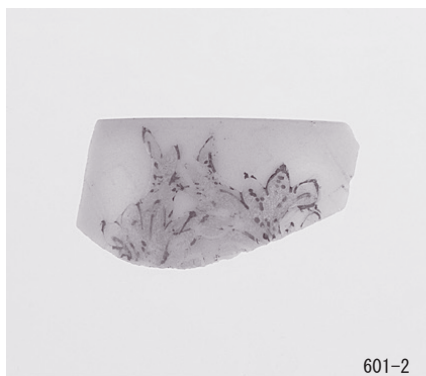
464-13

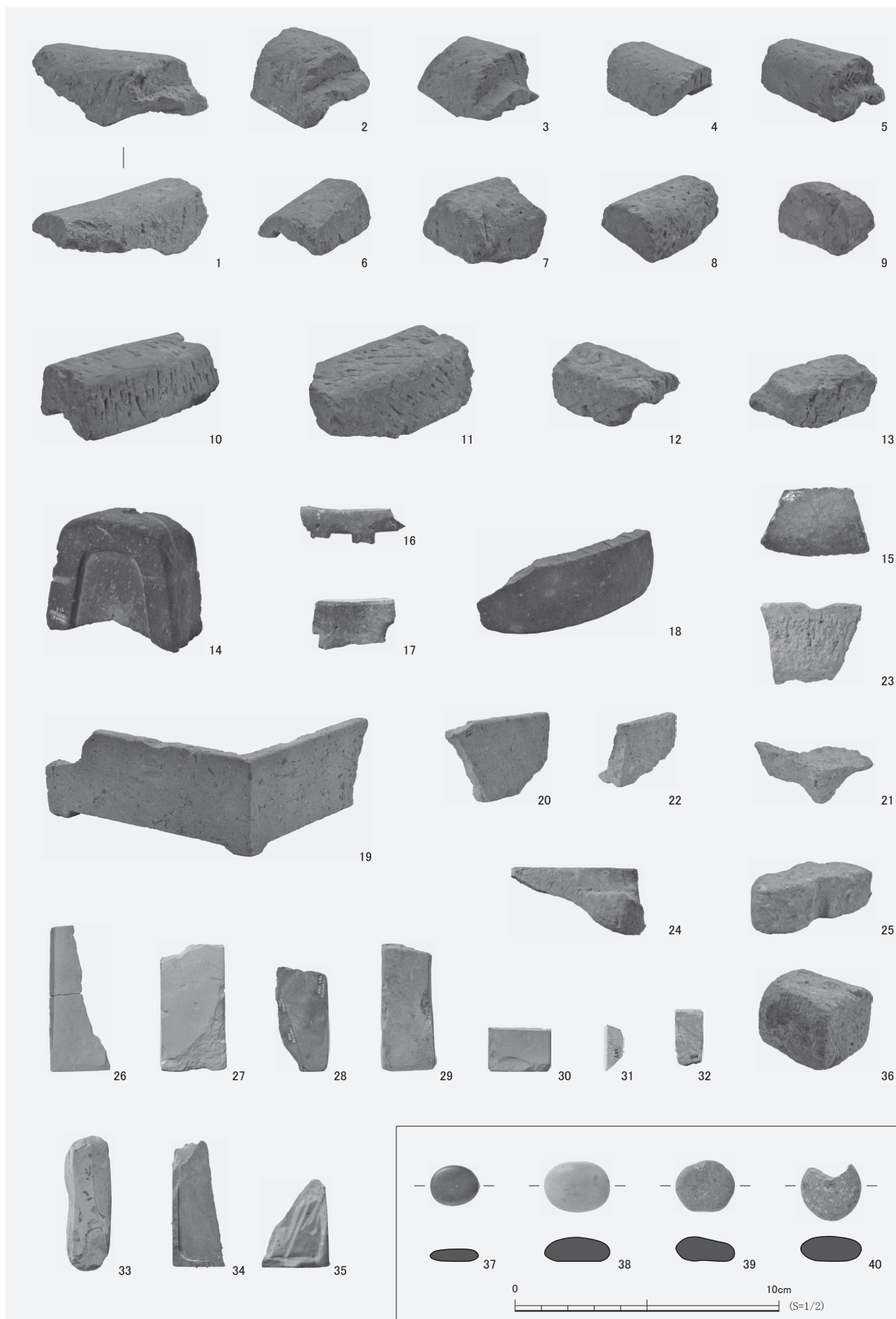


464-14

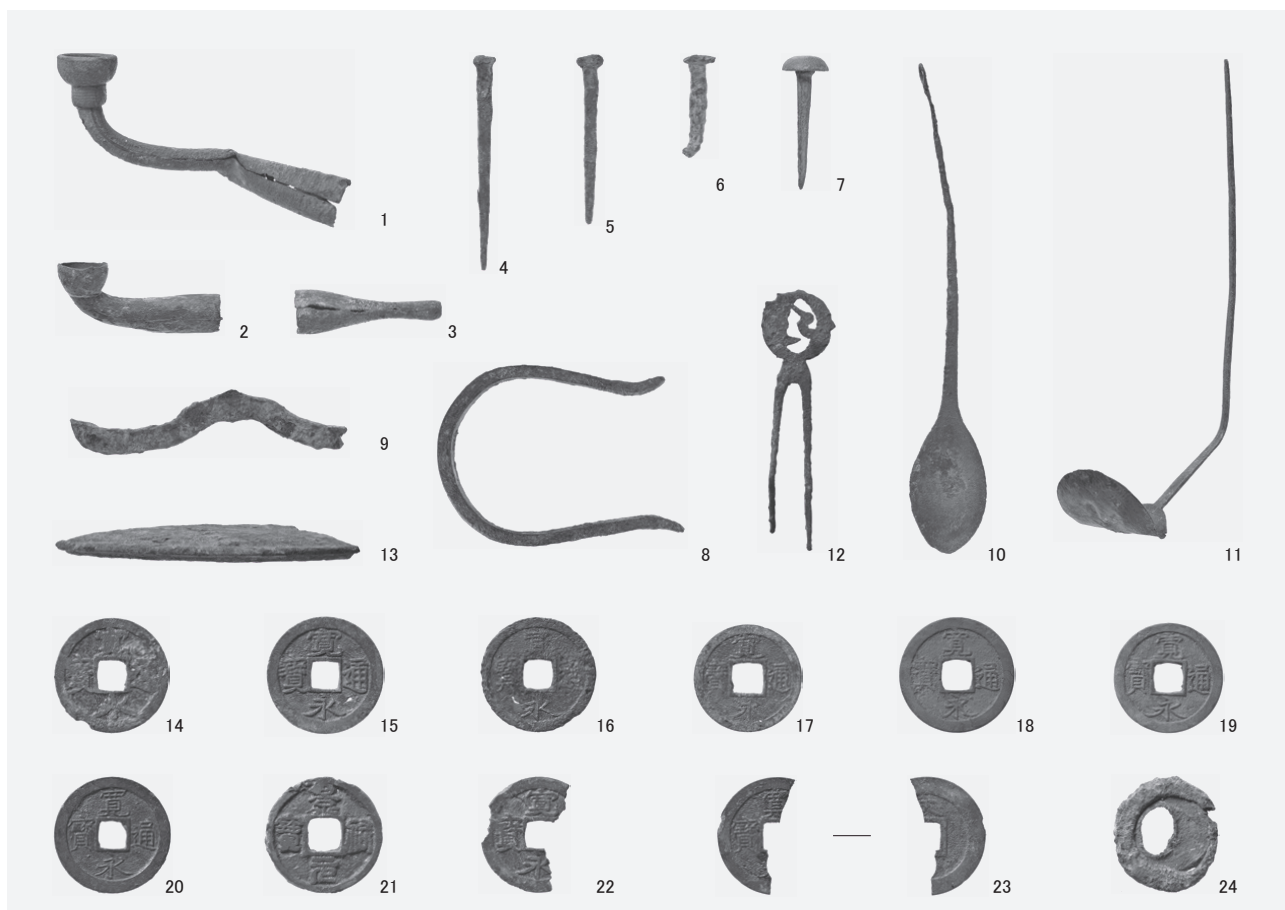


465-3

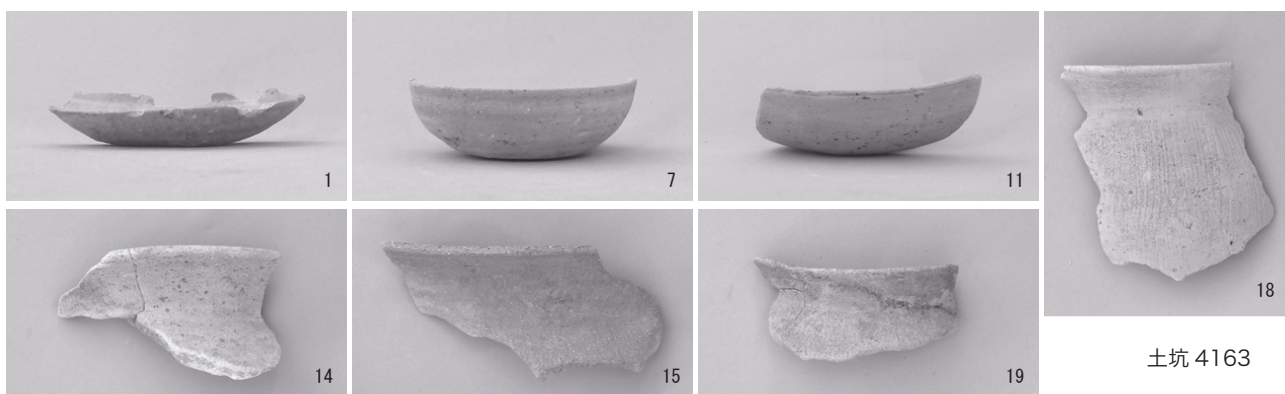




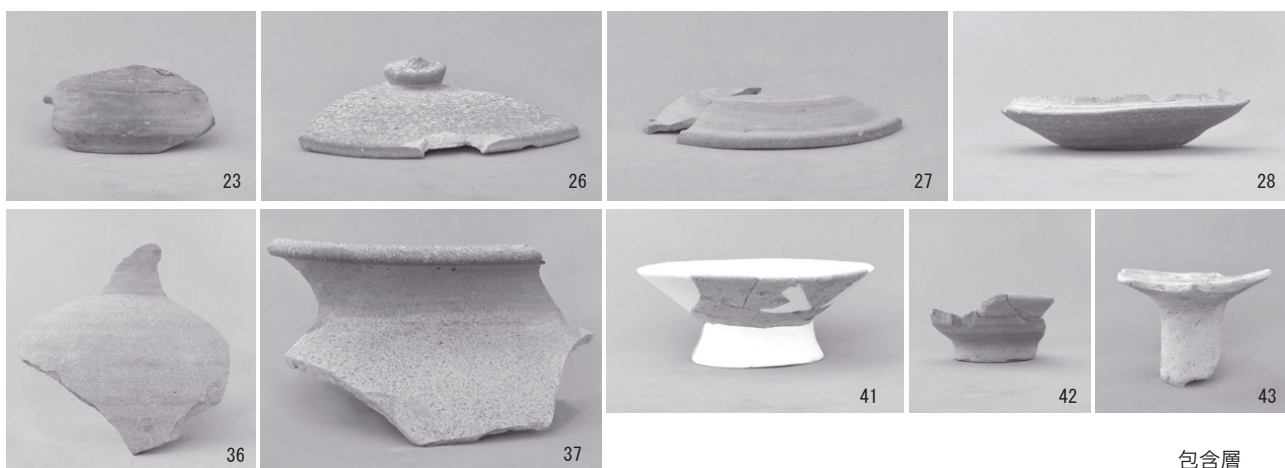
石製品



(1) 金属製品



土坑 4163



包含層

(2) 須恵器・土師器

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふくいじょうあと							
書名	福井城跡							
副書名	足羽川右岸線道路整備工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第 135 集							
編著者名	御嶽貞義 木村茉莉 釘谷 紀							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町 4-10 TEL：0776-41-3644							
発行年月日	西暦 2012 年 12 月 25 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査 原因
ふくいじょうあと 福井城跡	ふくいけん 福井県 ふくいし 福井市 とよしま 1 ちょうめ 豊島 1 丁目	18001	01141	36. 5657	136. 2198	20041014 ～ 20041126 ・ 20071016 ～ 20071221	965	記録 保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
福井城跡	城下町 集落	近世 古代	屋敷地・屋敷境溝・ 道路・柱穴列など 土坑	陶磁器・土師皿 金属製品・石製品 土師器・須恵器			調査区西半の 屋敷地は、近世 におけるこの 境界の町名（小 道具町）の元と なった、藩の小 道具方が居住 した組屋敷の あった区画で ある。	
要約	東西に長い調査区のほぼ中央を砂利敷道路が横断しており、その道路の両側にて各 1 軒分の屋敷地を検出した。 東側屋敷地は慶長期から慶応期まで、形状・規模などほとんど変化することなく存続しており、居住者も代々山本氏であったようである。この下層で 2 つの古代の遺構面（7 世紀中葉・10 世紀頃）を確認した。 西側屋敷地は、近世の遺構面が 3 つあるが、福井城下の絵図に見える屋敷区画の変遷と比較すると、それぞれ 17 世紀～18 世紀前半・18 世紀後葉～19 世紀前葉・19 世紀中葉以降に該当することがわかる。このうち 17 世紀後葉～19 世紀前葉の間は小道具方の組屋敷の区画であったようである。幕末には、北側の屋敷地と統合・再編され、3 軒分の屋敷地となる。							

福井県埋蔵文化財調査報告 第135集

福井城跡

－ 足羽川右岸線道路整備工事に伴う発掘調査 －

平成24年12月 5 日 印刷

平成24年12月25日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 足羽印刷株式会社

〒918-8231 福井市問屋町3丁目212
